

[27] Crossover

<https://doi.org/10.15017/19363>

出版情報 : Crossover. 27, pp.1-37, 2010-03. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン :
権利関係 :

CROSSOVER

No.27 March, 2010



九州大学大学院
比較社会文化学府

Contents

巻頭言

伊都キャンパスへの移転を終えて	田中 良之	1
-----------------	-------	---

比文を去るにあたって

比文を去るにあたり『比文創立十周年記念文集』のことなど	高田 和夫	2
1Q68から2010へ	高橋 憲一	3
自然保全研究室とともに	小池 裕子	4
生物多様性保全の担い手と大学院	米田 政明	5

受賞報告

九州大学C(チャレンジ) & C(クリエイション)プロジェクト2008特別賞VBL長賞を受賞して	神谷 美和	6
第48回久留島武彦文化賞(個人賞)の受賞	金 成妍	8

自著を語る

『戦時下の文学と(日本的なもの)―横光利一と保田與重郎―』～ハニカミ談議～	河田 和子	9
宮沢賢治のユートピア志向―その生成、崩壊と再構築	黄 英	11

比文叢書の反響

【書評】河田和子著『戦時下の文学と(日本的なもの)―横光利一と保田與重郎―』	坂元 昌樹	13
【書評】パールィシェフ・エドワルド著『日露同盟の時代 1914―1917―「例外的な友好」の真相』	長縄 光男	16
【書評】パールィシェフ・エドワルド著『日露同盟の時代 1914―1917―「例外的な友好」の真相』	井竿 富雄	19
【書評】松永典子『「総力戦」下の人材養成と日本語教育』	徳永 光展	23

新刊紹介

黄英著『宮沢賢治のユートピア志向―その生成、崩壊と再構築』	松本 鶴雄	30
-------------------------------	-------	----

社会人院生コーナー

赤いスカーフを捨て、夢を追いかけて	魏 景玉	31
-------------------	------	----

国内レポート

グラミン銀行総裁ムハマド・ユヌス氏による学生トークセッションの開催と書籍『BOPを変革する情報通信技術―バングラデシュの挑戦』の出版	大杉 卓三	32
--	-------	----

海外レポート

ソウル大学への交換留学を振り返って	金 泰植	34
-------------------	------	----

編集後記		36
------	--	----

表紙の説明

比較社会文化学府の研究・教育のキーワードは、「異なる社会と異なる文化」、「グローバリゼーション」、「地球環境」です。表紙のデザインは、諸問題が地球規模で進行する現代社会を学際的なアプローチで研究している本学府の姿勢を象徴しています。「異なる社会と異なる文化」を繋ぐ言葉をロゼッタストーンで、「グローバリゼーション」を大陸間を渡るカモで、「地球環境」をジグソーパズルの衛星画像で表しています。

表紙デザイン：独立行政法人 国立科学博物館・非常勤研究員 林 辰弥

伊都キャンパスへの移転を終えて

田中 良之

(比較社会文化研究院／学府長)

比較社会文化研究院／学府は平成6年に学際性・国際性・総合性をキーワードとする比較社会文化研究科として、六本松キャンパスにおいて発足した。以来16年間、このキャンパスを中心として教育研究を行ってきたことは周知の通りである。しかし、九州大学の統合移転計画の一部変更によって、六本松キャンパスの早期移転が決定され、平成20年度末に比文は伊都キャンパスに移転した。今回の巻頭言では比文移転の報告を行いたい。

さて、六本松キャンパスは周囲に多数の飲食店があり、交通至便な都市型キャンパスで、その意味では教員にも院生にも快適なキャンパスであった。天神にも近く、西南学院大学、福岡大学にも近い。さらにYAHOOドームにも。しかし、一方では施設が分散しかつ狭隘であるなど、大学院の施設としては不十分としかいいようのないものであった。とはいえ、郊外型キャンパスへの移転には不安もあり、比文内に設けられた移転作業部会で様々な議論をしながら準備を進めていった。院生からも様々な要望が出されたが、できる限り実現すべく教務学生委員会がそれに当たった。移転作業部会長であった小山内教授と、教務学生委員長の中野教授、それに長浜大学院係長にはご苦労をおかけしたが、移転は21年度末に特段の問題もなく完了した。

移転によって比文はどのように変わったのだろうか？現在、比較社会文化研究院は「比較社会文化研究院・言語文化研究院研究教育棟」という建物に入っている。やっと、一つの建物にまとまったわけである。といっても、人文科学研究院、法学研究院、経済学研究院、熱帯農学研究センター、記録資料館、留学生センター、総合研究博物館といった比文学府を構成する学内各部局の移転はまだであり、し

ばらくは長距離移動を強いられる不便さは残った。

院生たちの「場」にも若干の変化があった。すなわち、院生研究室の面積はわずかながら増加し、大きな分野ごとにまとめられた。また、新たに「メディアラボ」や「歴史学実習室」など分野ごとの「実習室」が加わり、院生の日常的な「場」であると同時に教員とともに過ごす「場」として機能している。情報調査室も機器が充実し、実験室も大幅に改善されたといえよう。

また、移転を機に比文教員用の公用車も購入した。中古ではあるが、8人乗り4駆のワゴン車であり、フィールドワークに活用されている。それだけではない。移転によって実験室面積がやや増加したこともあって、広島大学から軽元素分析システム、東京大学から超伝導磁力計を移管した。いずれも高価な実験機器である。そして、平成21年度補正予算によって電子線マイクロアナライザ(FE-EPMA)とレーザー・アブレーション誘導結合プラズマ質量分析装置(LA-ICP-MS)が導入された。これら微小領域元素分析装置によって、地球科学や考古学の先端研究を推進できるだけでなく、比文の創立以来の柱の一つである「文理融合の教育研究」を先端領域において展開できるようになった。

伊都キャンパス初年度の今年は、小池裕子・高田和夫・高橋憲一・矢田脩教授の最後の年でもあった。昨年是有馬学教授が退職され、比文創設以来中心となって活躍してこられた先生方も次第に少なくなってきたことは寂しい限りであり、大きな戦力ダウンでもある。しかし、来年度は若い5名の講師が採用予定であり、グローバル30の枠で外国人教員も配置される。若い人材を加え、新しいキャンパス、新しい教育研究環境で、比文の新たな展開を期待したい。

比文を去るにあたり—『比文創立十周年記念文集』のことなど

高田 和夫

(欧米社会講座)

●六本松本館5階志垣研究室

1994年3月に教養部は廃止されたが、予算の成立が遅びて6月に比文が発足したから、5月か6月か、その頃であった。志垣さんから「ちょっと、研究室まで来てくれんね」と言われ、出向くと、「教務委員長をやってくれんね」という話である。この比文設立準備委員長(初代研究院長)の依頼が、今にして思えば、少し大袈裟な言い方になるが、その後の私の歩む道をかかなりの程度決めた感じがする。新設の、これからどうなるか、皆目、見当もつかない大学院である。何よりそうした役職は不向きであると直感したが、私は断らなかった。その時点に至るまで、私は比文設立にほとんど参与していない。脇で志垣さんたちの奮闘ぶりを「見ていた」にすぎない。何らかの協力を、たとえ微力だとしても、すべき時であろうと思ったのは確かである。さらに、日頃、親しくしていただいている人間関係が大きく働いた(その後、1997年春、志垣さんは倒れられた。私は氏の遺著『フランス絶対王政と領主裁判権』[九州大学出版会、2000年4月]に付した「あとがき」で個人的な思いの一端に触れた)。

●第4代研究院長

志垣さんを途中から継いだ有馬院長とそれに続いた鳥院長の任期にも私は役職を続投した(後半は評議員になった)。私が九大に就職したのは、1979年春、32歳の時であったから、2010年春に定年退職すれば、31年間の長きに渡りこの大学にお世話になり、これまでの人生のほぼ半分を過したことになる。比文は16年度目を経過しつつあるから、私の九大時代の半分、人生の四分の一がこの大学院とともにあったことになる。私にとりその存在は限りなく大きいのである。しばしば、教養部と比文を比べてどちらが良いですかなどと尋ねられることがあるが、一言で答えるのにむづかしいし、基準をどこに置くかで返事は変わりうるであろう。2001年7月、鳥さんの後任院長に選出された。さすがにこの時は、研究活動にも精を出したく、もう勘弁してほしい

と正直、思ったものである。私の任務は、創設ではなく、既存組織の運営にあった。法人化という百年に一度の大学制度改革が間近に迫っていた。

●『比文十周年記念文集』

2年間の任期はあっという間に過ぎた感がある。制度改革とは言ってみても一国立大学の一部局が主体的にすべてを決するなどありえない訳で、そうしたことは重々承知のうえで何とも中途半端な日々を過したのかもしれないが、そんなことさへ感じる暇もなかった。2004年4月からの法人化に備えて、継続して高田にもう一期させたほうが便利かつ安全であろうと教授会構成諸兄姉に思われたらしく、見事に再選された。ここで負け惜しみを言う訳ではないが、大方の予測は外れた。法人化後、少なくとも私の任期最後の一年(2005年6月まで)はほとんど変化を感じることなく推移したように思う(その意味で大変になるのは、後継の根井院長からである)。院長室のパソコンが盗難に遭うといった椿事もあるにはあったが、全体として、比文運営は「平穩に」推移して、それなりの軌道に乗ることとなった。多くの手続き事項が日常化した。これは有難いことであった。一緒に定年を迎えることになる高橋憲一さんと少し若い清水展さん(現在、京都大学東南アジア研究所)が評議員として私を十分に補佐してくれた。

比文創立十周年を関係者は明らかに意識していたと思う。有志教員たちは幾つかの企画を実施した。私は10年の節目に反省を試みて将来の糧としたい願いもあって、『記念文集』の刊行を企図した。これに賛同して比文内外から80名近くの方が寄稿してくれ、氏名50音順に配列して440頁程の大作となった。紫の布張りの立派な本である(2004年2月刊行。意地でも4月の法人化までに出したかったことを思い出す)。この短文を書くため、久しぶりに書架から抜き出して机の上に置いた。懐かしさで一杯になった。もうそれだけの時が経っているのである。(2009・12・3)

1Q68から2010へ

高橋 憲一

(比較文化講座)

学問にまつわる思い出話をさせていただく。比文を去るにあたって、こんな話も一興ではないかと思うからである。

1968年は、私にとって忘れがたい転機の年となった。理工学部の3年生だった私は、秘かに専門変更を考えていた。そう考えた理由の一端が、間接的にせよ、大学闘争の激化にあったことは否定できないが、もっと直接的には、このまま大学を卒業してどこか大手の会社に技術者として就職したとしても、自分の人生と「等価交換」になるとはとても思えないことだった。自分が知りたいこと、自分にとって意義のあることに専心できるならば、等価交換になるような気がした。近代とは？ 近代科学とは？ 気になっていたこうした問いに向き合うには、さまざまな方途があっただろうが、科学の歴史的展開を辿るのが一番良いように思えた。科学史をやってみよう、と思い立ったのは、卒業後4年ほど塾の教師をしながら食いつないでいる時だった。このまま素人として興味を持っているだけでは埒が明かない。そこで仕事を辞めて専門的に勉強することにした。大学院では、近代が否定した(とされる)中世の科学史を伊東俊太郎先生のもとで学んだ。

大学院には1974年に入学。入学式では故・渡辺正雄先生から「科学史を学んでも就職先はありませんから、そのつもりで。」と言いつ渡されたが、入学した同期の5人はそんなことには一切頓着しなかった(ように思う)。ただひたすらテキストと研究論文を涉猟し、研究会で議論し、論文を書いた。あの頃は論文の読書や紹介の会、先生方の著作の批評会などが頻りに開かれており、そのうちのひとつである古代中世研究会の仲間(「古代中世4人組」と綽名された。文革の4人組が騒がれていた時だった)とは今もいろいろな所で顔を合わせている。研究仲間との出会いは貴重な財産になった。しかし、博士課程の3年間と大学院を卒業した1979年からの4年間は、大学や工業高校の非常勤講師、通信添削のバイトをしながら、研究職につくのをただひたすら待つだけの7年間で、今思い出しても帰りたいとは思わない冬の時代だった。

その辛い時代が終わったのが1983年。九州大学教養部が新

設した科学史のポストに着任した。ポストの新設はそう容易なことではないのだから、比文の前身である九大教養部には一方ならぬ恩義を感じている。というわけで、随分張り切って教え、研究した。非常勤講師としての教育経験があったとはいえ、張り切りすぎて失敗した。私の着任以前は理系の先生が教えておられたそうで、科学史は楽勝科目とのことで、六本松キャンパス最大の特1番教室が満杯の盛況だった。それが1年、2年と経つうちに、半分、その半分と減ってしまった。難しいことを話し過ぎたせいではないかと思っている。そのお蔭で、随分優しい(易しい?)先生になったのではないだろうか。

研究のほうでは気ままに思う存分没頭させていただいた。科学史を志してからの40余年間に、研究の関心対象は変遷した。ロジャー・ベイコン研究(修士論文)、ユークリッドの『反射視学(光学)』の中世における写本の伝承史(ラテン語テキストの批判校訂版とその英訳および解説、博士論文)、コペルニクスの天文学、フランチェスコ・マウロリコの光学、ガリレオの運動論形成史、等々。学問的関心は意図的に中世から近代への流れに沿ってきた。現時点での集大成が『ガリレオの迷宮』(2006)で、近代科学とは何かという積年の問いに対し、自分なりの解答を書いたつもりである。ノロノロとした歩みで時間が経ち過ぎたかもしれないが、自分なりに問い続けることができたのは幸いだった。比文の院生の皆さんにも、自分なりの問いを見つけ、問い続ける姿勢を望みたい。道は必ず開かれる。

最後に、タイトルにQとOを使ったのだから、かなり強引だが、QuO vadis, domine? (主よ、何処へ行かれるのですか [ヨハネ福音書13:36])を振って締め括りしたい。呼びかける対象を変えれば、「高橋、お前はこれからどうするのだ?」(退職後の心配)とも「○○さん、あなたは何処を目指しているのですか?」(研究目的)ともなるし、そして最も重要なのは、呼びかけの対象を「比文」と「九大」にした場合ではないか(……、あえて解説せず)(そしてもっと大きくすれば、「大学」「日本」「世界」等々)。私の……部分が杞憂であることを願っている。では、Vale(さようなら)。

自然保全研究室とともに

小池 裕子

(生物多様性講座)

私が九州大学に赴任したのは、平成6年教養部が改組されてできた大学院比較社会文化研究科の新設のときでした。比文は当時、新しい大学院として、学際性・国際性・実践性の3つの基本教育方針をかかげ、活気があり、教員同士も仲が良くよくコモンルームなどに集ってよく議論をしました。また、お花見やバーベキューなど、機会ある毎に、研究室を超えてよく集ったものです。



写真1：インドネシア・カリマンタン・バラウのWWF事務所です卒業生のHalimさんやHandokoさんと。

その後16年間比文にはお世話になりました。私は東京大学で12年間、埼玉大学教養部で12年間、九州大学で16年間と転任していて、いずれも共通していたことは文系・理系いろいろな専門の方が所属していたことです。それぞれの大学では、私の専門分野も人類学・動物学・先史生態学と変わってきましたが、自由に自分のやりたい研究をさせていただくことができ、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

平成9年4月には、国立大学として初めての財団法人との連携として、(財)自然環境研究センターとの連携大学院「自然保全情報分野」が新設されました。この国際的なプロジェクトや国内各地の保全政策策定に関わる経験豊かな(財)自然環境研究センターとの連携によって、これまで大学の研究教育では成し得なかった新たな学際的研究領域における広範囲な教育研究を実践することができました。客員教員として、発足当初は、米田政明先生・石井信生先生・齋藤千映美先生にきていただき、現在は米田先生・松島昇先生・菟田誠先生にお願いしてきた。この連携のお陰で、多数の自然保全に興味のある留学生が卒業することができた。そ

れぞれの先生方は、海外のフィールドを紹介して下さり、また調査にも同行して指導して下さいました。日本人学生にとっても海外調査に参加することは有意義で、いつもの学位論文にそれが現れていると思います(写真1)。お忙しい本務のなかで集中講義の時間を都合して下さい、また修論や学位論文の指導や論文推敲に熱心に取り組んで下さったことに深く感謝申し上げます。

平成12-13年度には、COEの「広域ネットワークによる希少動物保全の教育研究拠点形成」を獲得し、広域保全に重要な役割を果たすDNA解析に必要なキャピラリーシーケンスや衛星テレメトリー解析システム購入することができました。イルカの混獲個体やウミガメの産卵個体に装着し迅速に対応できるようになった。当時は写真にあるブレハブといわれた講義棟の4階に研究室があり、訪ねてきた人は風景のすばらしさを褒めるか、高所恐怖症の人には逆にびっくりされたものでした(写真2)。21年度から伊都キャンパスへ移転し、今まで分散していた機器類を配置良く設計することができました。今年度からグローバルCOEの「アジアの生態系保全」に参画し、炭素・窒素安定同位体質量分析機も、伊都キャンパスの工学部のみならず、理学部、農学部と様々な分野の人に活用されています。今後も設立当初の学際性・国際性・実践性の3つの基本教育方針が生かされ、21世紀の激動の時代を好機ととらえ、質の高い教育・研究を進められていくことと期待しております。



写真2：ブレハブにおむかう階段で、卒業式の日に。

生物多様性保全の担い手と大学院

米田 政明

(自然保全情報講座)



九州大学大学院比較社会文化学府（比文）と財団法人自然環境研究センター（自然研）による、自然保全情報分野の連携講座は1998年度から開始されました。この連携講座は、自然保全研究室として2009年度までの12年間に博士課程12名、修士課程18名の修了者を送り出しました。このうち、博士課程3名、修士課程2名は自然環境研究センターの研究者です。博士号取得12名のうち5名は4カ国からの留学生です。大学院課程修了者を送り出すことでは一定の成果をあげたと考えます。

この連携講座は、研究者及び専門職業人の育成を行うことを設置目的にあげていました。この目的は達成できたでしょうか。自然研職員と博士号取得の留学生に注目して、現在の活動分野を見ます。自然研職員で博士号を取得した3名の現職は、環境省職員、民間研究機関研究員、自然研研究員が各1名です。修士課程修了の2名は、自然研研究員として在職しています。博士号取得者の留学生に注目すると、大学教員を含めた政府機関研究員が2名、1名が地域多国間政府組織の事務局長、そして残りの2名は自然環境分野のNGOで仕事をしています。日本人の博士号取得者も1名、現在は国際機関に派遣されています。理系大学院における博士号取得者は、大学教員あるいは研究機関で研究生活を続けるのが当たり前と思っている方には、12名の博士号取得者中4名がNGOあるいは国際機関職員という状況は意外かもしれません。でも、これは生物多様性分野では世界の共通状況です。

自然環境・生物多様性分野の民間ビジネスとしては、環境影響評価のための地域環境調査は以前からあり、最近では温暖化ガスの排出権取引分野で金融類似サービスが生まれています。しかし、これ以外に民間事業として成り立っているものは多くありません。大学教員や、国際機関を含めた公務員枠も限られています。生物多様性の保全や、持続

可能な利用の重要性が言われていますが、だれがその計画や実施を担っているのでしょうか。ここで実質的な活動を行っているのがNGOです。環境分野のNGOというと、過激な運動か保護キャンペーンを行うグループであり、大学院の研究活動からは遠い存在と見られがちです。しかし、世界の生物多様性分野のNGOの多くは、科学的データを集め政策形成にも関わるアドボカシー型集団です。大学院での研究実績があり修士や博士号を取得していることが、その活動や政策提言が社会的に受け入れられる条件となっています。連携講座の博士課程を修了し、現在はNGOで仕事をしているインドネシア元留学生の2名は、沿岸生態系保全に向けた政策アドバイザーとして活躍しています。ザンビア出身の論文博士取得者は、4カ国にまたがるタンガニーカ湖の環境保全を担う初代事務局長をしています。

大学・大学院の役割はますます多様化しています。大学教員、研究機関あるいは企業の研究者を育てていけばよい時代ではありません。生物多様性分野では、国際機関とNGOの役割が高まっています。今年10月に、名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議が開催されます。会議出席者は、条約加盟193カ国からの政府代表団よりも、NGOの方が多く見込まれます。もちろん、NGOは玉石混交ですが、インドネシアやザンビアの例のように大学院修了者が活躍する専門職業集団が増えています。国際社会は、従来型ビジネスとして成り立ちにくい生物多様性分野の政策提言、さまざまな社会構成員との調整、調査モニタリングなどをNGOという仕組みに委ねているとも言えます。そのNGOの適格性判断基準の一つとして、構成員の大学院修了や研究歴を用いることが、世界的に今後増えると考えます。国際機関の専門職の場合も、博士号取得が求められます。

比文と自然研の連携講座はその役割を終えます。これまでの支援に感謝いたします。生物多様性分野における大学院の重要性は高まっています。名古屋大学や東北大学大学院では、環境分野リーダー育成を正面に出したプログラムを進めています。比文の生物多様性分野においても研究者育成だけでなく、連携講座のもう一つの目的であった、政策アドバイザーや地域プランナーなど専門職業人を送り出す視点を持ち続けていただくことを願います。

九州大学C(チャレンジ)&C(クリエイション)プロジェクト2008特別賞VBL長賞を受賞して —九州大学に集められた国内外のイネ品種—

神谷 美和

(日本社会文化専攻)

戦後の昭和20年代後半、「稲作史研究会」という会では、稲の起源や日本への稲作伝来について熱い議論が戦わされていました。メンバーは、民俗学者の柳田國男のほか、農学者の盛永俊太郎、安藤広太郎、加藤茂苞など。研究会の内容をまとめた『稲の日本史』はご存知の方も多いと思います。会の中心となったのは盛永氏で、安藤氏や加藤氏などともに九大農学部在籍されていた著名な先生です。当時九州大学を中心に、日本の稲の起源について研究が進んでいたといっても過言ではないでしょう。研究会は、各氏自ら収集した多くのイネ品種資料とその研究にもとづいたものでした。

このイネ資料(イネ遺伝資源すなわちイネ種子、籾)は、現在も九大農学研究院附属遺伝子資源開発研究センター及び農林水産省関係機関(農業生物資源研究所)に保管されており、数年に一度更新栽培されています。本プロジェクトによる研究(「九州大学所蔵の歴史的イネ在来品種による九大ブランド製品の考案」)は、この資料を用いて、九大をアピールできる製品を何か考案できないかという単純な発想をもとに始められたものでした。

しかし、調査が進むにつれ、これまで明らかにされなかった大きな歴史事実が判明しました。そもそも、なぜ、九大にこのようにたくさんの過去のイネ品種が保存されているのか?なぜ、当時の日本におけるイネのエキスパートが九大に集結していたのか?

「羅漢黄」、「蒙古稻」、「矮脚仔」、「米租(サリベ)」、「モンドンチャルベ」…その答えは、九大が保管するイネの品種ひとつひとつが物語っていました。

九大が保管するイネ品種資料の基礎となった「国内外の品種系統」(HO系統)のほとんどは、安藤氏、加藤氏、盛永氏が九大在籍の1920年~1946年ころに、九大が外部から受け入れたという形をとっています。収集元は、国内各地の農事試験場のほか、満州鉄道や蘇州領事、台湾総督府、朝鮮半島の日本農事試験場などでした。日本の種苗場が北朝鮮にかつて存在し、そこから持ち込まれた在来品種をも九大が保管していることは特筆に値するでしょう。

話は帝国大学時代に遡らなければなりません。

大正7年(1918)の米騒動を契機として、日本は国内の米

不足を外来米で補おうとしました。対象「農場」となったのは、近隣の朝鮮半島、中国、台湾など東アジアの国々です。日本はこれらの国々で米の栽培経営と調整をはかったわけです。そこでは各国の在来品種にかわって徹底して日本品種が栽培され、各国の風土に適合した日本人嗜好の米品種へ品種改良が行われました。台湾のイネはこの時代、従来のもとのまったくちがった日本型品種が増加したのは有名な話です。そもそも、現在国際的に通用しているイネ分類法の一つであるこの「日本型」すなわちジャポニカという言葉をはじめて用いたのは九大の加藤氏でした。現在、中国ではこの呼び方に対して、「粳」・「秈」(秈はインディカの中国名)にするべきであると言っている研究者もいます。国内の米が足りてくると、日本の東アジアにおけるコメ拠点は、今度は大戦への兵站としての意味を持つてくるようになりました。

九大イネ資料の中核となり、冒頭に述べたイネの起源や稲作伝来について研究のもととなった品種群は、こういった時代背景下で、東アジアを中心とした軍事上の拠点から集められたものです。戦前は現代のように飛行機で自由に海外に行ける時代ではありません。博多という場所にある九州帝国大学は、海外とくに東アジア稲作開発のための絶好の窓口となっていたのでしょうか。

そういえば、農学部初代学部長本田幸介氏は、先に初代朝鮮総督府勸業模範場長をつとめた人です。また、加藤氏や安藤氏なども朝鮮総督府および海外に関わっていました。研究者にとってそのような時代だったのです。なお、盛永氏は戦後、FAO(国際連合の食糧農業機関)の日本代表をつとめられています(その際の資料も九大保管)。

こういった意味において、本研究を行っていたまさに2008年、韓国-日本間で重大な交渉が行われまし



夢の博多銘米「唐坊」。生協のほか、大学院係にも置こうという計画。

た。総督府時代に日本が韓国から持ち帰った朝鮮在来作物遺伝資源（九大保存のイネ品種含む）を、韓国に返還するというものです。また、敗戦によって日本が韓国に置き去らざるをえなかった日本品種も、日本に返還されるということになりました。「返還」といっても、いうまでもなく植物は種子で増えます。まとまった量の種子をそれぞれ相手方に渡すということです。在来遺伝資源は現代社会にはない「絶滅種」と呼ぶべきものばかりです。韓国農村振興庁側と日本農林水産省側双方に確認したところ、今後両国でこれらの遺伝資源を「共有」するとのことでした。

ちなみに、九大のイネ資料には、九大で生まれた改良品種である九大号がいくつか存在します。日本品種であるこれを用いれば、比較的栽培も簡単で、文字通り九大グッズが安易にできたことでしょう。しかし、本研究であえてそうしなかったのは、以上のような歴史事実を知るにおよび、一方的な「強制」とその結果としての「所蔵」（所有）というのではなく、もっと東アジアを自然な形で一体として感じることができるような、民衆の目線での品種とそれによる

製品を模索しなかったためです。稲作はアジア共通の文化です。東アジア全体で「共有」できる製品を考案したいという願いがありました。

そのようなことで、研究はその方向性を調整しつつ現在も継続しています。（なお、プロジェクトメンバーは貴田潔／比較社会文化学府、大島健司／経済学部。）



海外品種で試作した
赤米酒
「東アジアの風」。

第48回久留島武彦文化賞(個人賞)の受賞

金 成 妍

(立命館アジア太平洋大学・久留米大学非常勤講師)

忘れもしません。2004年5月31日のことでした。六本松の九大の正門前を歩いていた私の足を止める声がありました。指導教官の花田俊典先生でした。「オーイ、ソンヨン、ちょうどよかった。これ読んでみて」と、先生はわきに抱えていた本2冊をくれました。『久留島武彦追悼集 偲ぶ草』と『久留島武彦童話五十年記念 海に光る壺』でした。その2冊の本を受け取って家に帰った2日後、花田先生の訃報を知らされました。

韓国生まれの私は2002年九大の大学院に入学し、花田先生の許で修士2年を終え博士課程に進学したばかりでした。日本統治期に朝鮮の留学生が書いた日本語の作品(金史良の『光りの中に』)に惹かれて大学院に進み、「近代文学」というものに憧れて花田先生のゼミに入ったものの、何も分からない私にはゼミで交わされる日本語がまるで火星人の言語のように聞こえました。そこで、「近代」という時代を覗くため、日本統治期に朝鮮で刊行されていた新聞を毎日のようにめくるようになりました。その過程で、1923年朝鮮半島で行われた巖谷小波の口演童話活動の記録を見つけることとなり、1923年方定煥によって創刊された『オリニ』という児童雑誌によって朝鮮の近代児童文学が始まったという定説に、巖谷小波を中心とした日本からの活動という新たな視点を加え、「〈教化〉と〈解放〉の朝鮮児童文学」という題目の修士論文をまとめました。それを持って博士課程に進学し、いよいよ本格的にどのような方向に向かうべきか、悩んでいた時期でもありました。

苦しい時期でした。何も出来ず家に引きこもっていました。しかし、2冊の本がありました。花田先生から最後に渡された2冊の本。これは花田先生から与えられた課題だ—そう思うと、胸がいっぱいになりました。「久留島武彦」という名前は、一度だけ聞いたことがありました。修士論文の公開審査の時、松原先生から「口演童話なら久留島武彦を調べるといいですね」と言われた時です。

2冊の本を手を、さっそく久留島武彦の生誕の地、大分の玖珠に行ってきました。ところが久留島武彦記念館に残っている資料は本5冊とほこりだらけの肉声テープ6本、写真数点のみでした。久留島武彦研究というのは、丈の高い草が茫々で前が見えなく、草を一つ一つ刈り取って前に進まないといけない森の道だということが分かりました。絶望的な気持ちで、今は立教大学に移った石川先生に相談を

すると、「よかったじゃない？ソンヨンが久留島武彦全集を作ればいい」という言葉が返ってきました。その言葉でスイッチが入りました。石川先生の協力で個人で集められる久留島武彦の資料をすべて収集する一方、年譜作りに夢中になりました。非常勤の仕事も全部辞め、見守ってくれる松本先生の笑顔に励まされて、ゼミにも出席せず、気が狂ったように東京の国会図書館、近代文学館、韓国の国会図書館、国立中央図書館の資料を掘り下げました。年譜作りだけで3年かかりました。新聞調査も再開し、1900年から1940年までの『朝鮮日報』『毎日申報』『東亜日報』『朝鮮日報』を徹底的にめくって、「日本人による朝鮮口演年譜」なるものも完成するに至りました。そして昨年、博士論文「越境する文学」を仕上げました。

公開審査を終え、去年の5月アメリカに短期留学をしましたが、アメリカにいる間、日本青少年文化センターというところから連絡を受けました。久留島武彦の最後の弟子となる畑崎龍定という方の推薦で第48回久留島武彦文化賞の個人賞を受賞することになったという知らせでした。最年少の、また外国人としては初めての受賞だということを知り、アメリカから急ぎよ東京に戻って、7月に行われた授賞式に参加しました。

博士号を修得したら韓国に帰るつもりでいた私は、この受賞をきっかけに日本でもう少し納得がいく「何か」のために頑張ることにしました。現在は、玖珠で初めて開設された「久留島学講座」の講師となり、月4回、玖珠に出かけています。31歳になった韓国人女性が、平均年齢55歳を超える日本の年配の方々の前で久留島武彦について話している異様な光景が、新鮮な起爆剤となって、久留島武彦への関心が高まれば良いなと思っています。



『戦時下の文学と〈日本的なもの〉 —横光利一と保田與重郎—』 ～ハニカミ談議～

河田 和子

(比較社会文化研究院特別研究者)



比文叢書XV 花書院 302頁
定価 2800円(税込み)

A「このクロスオーバーには、自著紹介コーナーがあって、毎年比較社会文化叢書から本を刊行してもらった著者は、その恩返しに(?)自著について語るのが、ここ数年恒例になっているようですね……と言ったら、後々出版される方のプレッシャーになるかもしれませんが。」

B「しかし、それなら、去年3月(2009年)、比較社会文化叢書から『戦時下の文学と〈日本的なもの〉—横光利一と保田與重郎—』を出版したその本人が、今回、直接顔を出して語らないのは、一体どういう事なのかねえ?」

A「いやー、それが、本人がなにおんハニカミやなもので、自己PRは苦手だし、なんだか照れてしまうから、とか何とか言って、まともに顔を出さないんです。」

B「それで、我々に語らせようと言うのかい。今どき流行のハニカミ何とかじゃあるまいし、いい年してハニカミも何もなからう。まったく困ったもんだ。けしからん。」

A「まあまあ。そのかわり、この談話の記録役として後で本人が文章にそのままおこすということですから。それに、大概こういう場合、本の著者は、その研究テーマを考えた院生時代を振り返り、いかに博論をまとめるのに苦心したとか、お世話になった先生や周囲の方々の話をしながら、どのようにして博論を本として出版するに至ったの

とか、研究内容を端的に紹介しながら語るでしょう。でも、当人の場合、松本常彦先生に指導していただく前の指導教官(花田俊典先生)が心筋梗塞で2004年に急逝されているので、研究テーマを考えるきっかけなど語るのもちょっと辛いのでは……。それに、今号ではこの本の書評も転載されるので、そこで本の内容も詳しく説明されています。話が重複するかもしれないので、ここで刊行に際してのエピソードなどを私達に語らせようというのでしょうか。」

B「でも何かいいわけがましいね。それに、自著を語る、を語るメタ自著紹介になっているし、前置きも長くなるから、サッサと本題に入ろうか。で、この本は、なんだ、そのハニカミ著者が2008年2月に学位(課程博士)を取得した同名の博士論文をもとに改稿したもので、サブタイトルにもあるように、昭和10年代の文壇をリードした小説家・横光利一と批評家・保田與重郎の戦時下の言説がそれぞれ考察され、比較検証されている。昭和10年前後、〈日本的なもの〉とは何かという議論が知識人の中で流行したのだが、横光・保田の言説を検討することで、彼らに共有されていた〈日本〉に関わる問題意識がどのようなものであったのか、その差異を明らかにしながら、戦時下の〈近代の超克〉論議との関わりを検証している。横光・保田両者において、〈日本的なもの〉の希求がどう展開され、近代主義批判に繋がっていくのか、〈日本的なもの〉の問題機制が、〈文芸復興〉や〈近代の超克〉にも連繋するものであった点を明らかにしながら、その問題点を検証した所に本書の特徴もあるのだね。要するに、昭和10年代(またその前後)の文学における近代主義批判の諸相とそこに内在する問題を二人の作家に焦点を当てる形で考察したものなんだ。本書は、第一部が横光論、第二部が保田論という風に二部構成になっている、両者の作家論としても読めるから、うむ、例えるならば、一粒で二度おいしいアーモンドグリコ(チョコ)のような構造を狙ったものかな。」

A「そのグリコの比喻は、私にはよく分かりませんが(しかも、そのキャッチフレーズ自体ずいぶん古いし……)、横光と保田といえば、敗戦後、戦争協力者として文壇から弾

○○○ 自著を語る

効された作家でしたね。横光は、戦前、文学の神様とまで称された作家でしたが、戦後、〈日本的なもの〉を希求した戦中の文学を集約するような存在として、ポロクソに叩かれたあたり、何かかわいそう、って当人、そんなこと言っていましたよ。修論も、横光における近代の超克というテーマでしたし、学部時代の卒論も、新感覚派から新心理主義と言われた時期の横光の作品について書いたそうですから、年期の入った横光ファンなんでしょう。あえて時代の抱える難題に取り組み、新しい文学の創造に人生を賭ける、その気負った生き方も男性的で文学者としてカッコイイのだとか。]

B「その点、保田の方はどうも好みじゃないらしいけどね。昭和10年代、戦中の知識人の問題を考えるには、重要な作家なんだが、保田については、国学思想の影響を受けて国粹主義的な所もあるから、反動的ということで、戦後、研究対象として論じることもタブーだったような所がある。今の若手研究者の間では、けっこう論じられるようになったが、それも初期評論が多く、〈大東亜戦争〉期のものを論じたものは余りないようだ。この本では、敢えてその時期の保田の言説に焦点を当て、戦中の思考を掘り起こしながら、京都学派の哲学者とか同時代の思想家との関わりも検証している。ただ、保田を論じるとなると、やはり、何故そのことを問題にするのかという論者の問題意識とともに、自らの批評的立場がつよく問われることになるからねえ、中立的立場で検討していても、ややもすると保田のシンパじゃないかと誤解されかねないようだね。だいたい当人、方向オンチなんだろ、右も左も(思想的に)よう分からん、やりにくいと時々ぼやいていたね。ところで、学位論文を提出してから、どういう形でこの本が出版されたのだったか?」

A「博論を本にしたらという話は、学位論文審査のすぐ後、主査の松本常彦先生の方からあったそうですね。そもそも、恩師を亡くして茫然自失だった当人が、博論を完成させそれを本にまとめることが出来たのも、松本先生の的確丁寧なご指導と励ましあってのことでしょう。本にまとめれば、一つ大きな業績になるし、就職にも有利とアドバイスしてくださったとのこと。もっとも、比較社会文化叢書の刊行は審査があり、決定まで時間もかかったので、本人心配していましたね。学位取得は2月、比文叢書原稿締め切りは6月末で、余り手を入れる時間もなくて、バタバタだっ

たのでは。元の博論は、原稿用紙に換算して900枚以上あったのですが、比文叢書原稿は600枚程度におさめなくてはならず、三分の一ほど削っていますね。序章、終章を短くまとめ直し、戦後の横光と保田の言説を検討した章、二章分は削除して、650枚ちょっとになっています。他の章も部分的に表現など変え、昭和初年・10年代の〈日本的なもの〉関連リストについては、記事を補足追加していますね。]

B「自著を出版すること自体とても嬉しいことだろうが、周囲の反応もやはり気になろうね。」

A「学位審査等でお世話になった先生をはじめ、近代文学関係の研究者、大学・公共図書館などの公的機関にもこの本を送ったらしいですね。あまり他の研究者に論文を送ったことがないので、後日謹呈者から丁寧なお礼のメールや葉書が来たら、いたく感激していましたよ。面識のなかった大先生からも、葉書をいただいて随分励みになったとか。いろいろな方から、コメントやご教示をいただけるといいですね。」

B「日本近代文学関係の学会事務局にも本を送ったというから、最近では、いくつかの学会誌に書評も載るようになったらしい。当人、ドキドキ、ハラハラ、ソワソワしながら眼を通してに違いない。まあ、今のところはさいわい、比較的、好意的に評してもらっているようだがね。しかし、著者の手をいったん離れ、世間の風にあたると、この先どう小突かれたり苦言・苦情(?)が来たりするものか分からないからねえ。いわば、当人、まな板の上の鯉のような状態だし、まだいろいろ残した課題や保留にした問題だって沢山あるんだろ。全く、はにかんでいる場合じゃなからう。」

A「相変わらず、ニヒルな見方をされますね。ところでセンパイ、これを読んでいる人は、私達が一体何者なのか気になるのじゃありませんか。自己紹介も何もしていませんし。」

B「それを聞かれると、ちょっと困るな。なにせ自著紹介をしなくてはということで、ハニカミ著者の脳中で妄想、いや生成・創造されて、ここに登場することを要請されたんだからねえーまあなんとというか、我々は、新・新感覚の浪漫派的〈妖精〉A&Bとでも名乗っておくことにしよう。」

A「やれやれ。結局、最後は、オヤジギャグ的なオチなんですね。」(了)

宮沢賢治のユートピア志向—その生成、崩壊と再構築

黄 英

(中国海洋大学)

本書を上梓したのは2009年2月。前年の2008年初夏に最後の仕上げの作業をおこなっている頃、ちょうど5月12日の中国四川大震災が起きた。大震災情報をライブで報道するテレビニュースが毎日耳に入り、目に映った。一幕一幕の救助の瞬間に感動させられ続けた毎日だった。そのとき、賢治のあのよく知られた「雨ニモマケズ」がどこからか聞こえてくるような気がした。「東ニ病氣ノコドモアレバ／行ツテ看病シテヤリ／西ニツカレタ母アレバ／行ツテソノ稲ノ束ヲ負ヒ……」。「デクノポー」と呼ばれるような立派な人物が実は身の周りに大勢いることを発見して、改めて賢治の人間的な魅力に強く惹かれた。

今になって振り返ってみると、日本で「賢治現象」と呼ばれるほどの人気ぶりはいったいどこから由来したのだろうかと思う。賢治の人間的な魅力は言うまでもなく、賢治文学に現れたユートピア志向が今現在の人々を魅了する要因の一つではないかとも思われる。

賢治が自ら書いた、童話集『注文の多い料理店』の新刊案内では、次のような記述がある。「イーハトヴは一つの地名である。(中略)大小クラウスたちの耕してゐた、野原や、少女アリスが辿った鏡の国と同じ世界の中、テパンタール砂漠の遙かなる北東、イヴン王国の遠い東と考えられる。実にこれは著者の心象中に、この様な情景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である」。ここには、賢治の故郷岩手県をドリームランドの原点として、イーハトヴの夢が語られている。現実の岩手県はドリームランドとは反対に、悲惨な農村の風景が広がっていた。にもかかわらず、賢治は心の中で、それをひとつのドリームランドとして展開する、否、むしろドリームランドに変えようと願っている。このイーハトヴへの夢は賢治のユートピア志向の表れとも言えよう。

さらに、「農民芸術概論綱要」において、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と述べられているように、彼のユートピア志向は、己だけのものではなく、世界全体の幸福を求めるものである、とすることができる。

賢治文学はユートピア志向に溢れていることは、よく知られているが、それを真正面から論じた評論や研究書は意

外に少ない。吉本隆明「賢治文学におけるユートピア」や、小野隆祥『宮沢賢治の思索と信仰』があげられるが、いずれも理念が先行する傾向が強く、具体的な作品を中心に、しかも、トータルに検討した論考というのはほとんど見当たらない。本書は作品分析を通して、時代の流れにそった動的な視点からとらえることを主目的としている。

ユートピアという言葉は、もともと16世紀のイギリス人トマス・モアが書いた本の題名で、物語中に登場する架空の国の名前である。ユートピアという語はその後一般的となり、理想郷を意味する一般名詞にもなった。本書においては、このような一般の理想郷という意味で使うのが基本であるが、あえて理想郷という言葉を使わず、ユートピアを使うのは、ユートピアが一般の理想郷より現実批判の要素がより強く反映されているからである。川端香男里の言葉で言えば、つまり、「理想郷の夢の根底にはいずれにも現実の否定があるにしても、ユートピアほど「否定」の動機が一貫しているものはない。反対物の提示、反対物の構築による現実批判・諷刺の衝動がその根底にある」(川端香男里『ユートピアの幻想』講談社 1993年10月26頁)ということになる。賢治に即して言えば、理想世界を求めるとともに、その反面の現実世界への批判があることも忘れてはならない。また、賢治の求める〈全体〉の幸福は〈個〉への厳しい否定のうえに成り立つものであることも忘れてはならない。こうした二つの面における否定の意味を強調するために、本書は「ユートピア」という言葉を用いることにした。

本書は六章からなっており、賢治文学におけるユートピア志向の生成、崩壊と再構築の過程をたどっている。

第一章では、今まであまり注目されてこなかった初期作品『旅人のはなし』からと、よく知られている「双子の星」を取り上げ、ユートピア志向の生成段階の特徴を検討した。

すでに触れたように、賢治におけるユートピア志向は現実に対する批判が背景として存在している。そこで、第二章では、「双子の星」とほぼ同時期に構想・執筆された「蜘蛛となめくぢと狸」を取り上げ、同時期における賢治の現実批判の様相を検討した。

第三章では、第二章の補足として、それ以降、大正13(1924)年までのいくつかの作品を取り上げ、現実批判の具体的な

○○○ 自著を語る

ベクトルや方法を、総合的に考察した。

第四章は大正13(1924)年の「黄いろのトマト」を取り上げた。作品のなかに現代風の原始的な楽園が描かれているが、主人公たちは何らかの外部要因で自らそこを出てしまう。これはそれまでのユートピアを求める方向と正反対である。主人公たちは外で心を痛める体験をしてから、家に戻るといふ結末であるが、元通りの世界に戻るのとははや不可能なので、楽園の崩壊はまぬかれない。

この時期、すなわち大正13(1924)年ごろ及びそれ以降の言説には、「新しい」という修飾語のつく文句がよく現れてくる。これは新しいユートピア再構築への出発の徴だと言える。ゆえに、第五章では、大正13(1924)年ごろ及びそれ以降昭和2(1927)年までの作品群を取り上げ、ユートピアの新たな展開について検討した。そのなかで、晩年まで続く現実回帰の傾向はすでに「ひかりの素足」において現れはじめるので、とくにこの作品に重点を置いて検討し、ユートピア再構築の出発点として位置づけた。

第六章では、「ひかりの素足」に現れはじめる現実回帰のテーマの更なる展開を、晩年の長編作品「ポラーノの広場」を取り上げ、具体的に考察した。そのなかで、現実回帰を決心する理由は何なのか、現実的な理想郷はどのようなものなのか、それにたどりつくまで、どのようなプロセスがあるのかなどを、登場人物の分析や、変転する「広場」の様相の整理や、武者小路実篤「新しき村」との比較を通して、新しい理想の「広場」とは何かを、追究した。

賢治におけるユートピアの究極の理想はやはり全体の幸福を目指すことである。そこでは、〈全〉と〈個〉の矛盾が必ず生じる。つまり、〈全〉の達成のためには、〈個〉への執着の克服が必要なのである。この点において、〈個〉への執着とその克服、という両端の間での揺れが、賢治の晩年まで続いている。賢治は晩年の病床で、死の十日前に書いた柳原昌悦宛の書簡(1933月11日付)に、次のような心境を吐露している。

「私のかういふ惨めな失敗はたゞもう今日の時代一般の巨きな病、『慢』といふものの一支流に過って身を加へたことに原因します。僅かばかりの才能とか、器量とか、身分とか財産とかいふものが何かじぶんのからだについたものででもあるかと思ひ、じぶんの仕事を卑しみ、同輩を嘲けり、

いまにどこからかじぶんを所謂社会の高みへ引き上げに来るものがあるやうに思ひ、空想をのみ生活して却って完全な現在の生活をば味ふこともせず、幾年かが空しく過ぎて漸くじぶんの築いてゐた蜃気楼の消えるのを見ては、たゞもう人を怒り世間を憤り従つて師友を失ひ憂鬱病を得るといったやうな順序です。(中略)風のなかを自由にあるけるとか、はっきりした声で何時間も話ができるとか、じぶんの兄弟のために何円かを手伝へるとかいふやうなことはできないものから見れば神の業にも均しいものです。そんなことはもう人間の当然の権利だなどといふやうな考では、本気に観察した世界の実際と余り遠いものです。どうか今のご生活を大切にお護り下さい。上のそらでなしに、しっかり落ちついて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならないものは苦しんで生きて行きます。」

このように、賢治は病床で、かつて高揚した気分で理想に向かって邁進した自らの過去を振り返って、自己反省をする。かつてのユートピア志向の空想性に気づいていると言えよう。また、かつて掲げた〈個〉を犠牲にして、〈全〉のために何かをするという自己犠牲の理想も、ここでは傲慢な振る舞いとして退けられている。

晩年の病床におけるこのような感慨は、ユートピア理想そのもの(全体が幸福になる)を否定するものではなく、あまりに現実に目を向けなかった空想的な過去への反省であり、決して自己犠牲の精神そのものを否定しているわけではない。広範囲の「みんな」に対してはおろか、身近にいる兄弟に対してさえも支援の手を差し伸べることのできなかった人間として、それを言う資格がないと謙虚に反省しているのである。

自己を無にした究極的な生き方は、そのときの賢治には、もはや不可能であり、代わって、楽しかろうが、苦しかろうが、現実に根ざした確実な生活を営むことが心底からの願いになったとしても不思議ではない。病床で最低限の営みもできない人間にとっては、こう思うことが有縁の人々に対するせめてもの償いであろう。

比文叢書 XIV 花書院 209頁

定価 2,500円(税込み)

【書評】 河田 和子 著

『戦時下の文学と〈日本的なもの〉—横光利一と保田與重郎—』

(花書院、2009年)

「日本近代文学」第81集(2009年11月、日本近代文学会)より転載

坂元 昌樹

(熊本大学)

「文壇と一部の評論壇では、一口で云うと『日本的なるもの』の検討が風をなしている」の一文に始まる評論「日本の民衆と『日本的なるもの』」を戸坂潤が発表したのは、昭和12年4月号の雑誌『改造』であった。戸坂がそこで批評の対象とする〈日本的なもの〉もしくは〈日本的なるもの〉に関する論議が、昭和10年前後の日本の言説空間を席捲していたことは周知の通りである。この〈日本的なもの〉をめぐる論議に関しては、昭和10年代の日本の文学と思想を検討する上での重要な論点として、従来の研究史においても様々な角度からの考察が蓄積されてきたことは再言を要しまい。しかし、当時〈日本的なもの〉として人々に構想されていたものは、そもそも一体何であったのだろうか。昭和10年代におけるこの〈日本的なもの〉に関わる多様な言説の歴史的評価については、先行論者の幾多の達成にも関わらず、依然として残された課題が少なくないと思われる。

本書は、この昭和10年代の文学と思想における〈日本的なもの〉の問題機制に関して、横光利一と保田與重郎という同時期において強い影響力を發揮した二人の文学者を取り上げて、両者の言説を分析しつつ、それぞれの言説と〈日本的なもの〉との関係性を検討したものである。言うまでもなく、横光と保田は、昭和10年代の〈日本的なもの〉に関する論議を、それぞれ小説と評論の各領域において領導した代表的な文学者であった。河田和子氏は、これまで横光論と保田論を氏の研究のいわば両輪として並行して発表してこられた。本書は、その二つの研究対象に関する従来の氏の論考について、戦時下の〈日本的なもの〉の問題という視点を媒介として、「文芸復興」の問題や「近代の超克」論議にも論及することで、横光と保田両者の思想の統合的な考察を試みたものとなっている。

本書は二部から構成されている。冒頭に置かれた本書全体の趣旨と構成を示した「序章」の後に、まず横光の小説を論じた第一部「横光利一の科学主義と近代の超克」が置かれ、

次に保田の評論を対象とした第二部「保田與重郎の文明開化批判」が続いている。第一部と第二部は内容的にはほぼ独立しているが、最後に本書全体の結論である終章「横光利一と保田與重郎における近代主義批判」が置かれており、そこで横光と保田が相互に比較対照されることで、第一部と第二部の内容を緊密に結びつける構成となっている。

第一部の横光論において、著者は横光の一連の小説を〈日本的なもの〉という本書のテーマとの関連において、時系列に沿って読み解いている。第一章「近代科学の文学的受容と〈機械〉の新感覚」では、横光の小説「鳥」を検討して、横光が自然科学的な認識方法を文学に導入して、近代科学の影響を受けた新たな時代感覚の表現を試みたが、一方で自然科学の持つ合理主義的認識で捉えきれないものとしての人間心理の問題に突き当たったとし、それが近代科学の認識では把捉できない日本人の心性という〈日本的なもの〉への横光の関心に繋がるとする。続く第二章「『紋章』における「自由」の精神と日本的「自然」」では、『紋章』中の主要人物である山下久内に、実践的な「自由」精神と日本的な「自然」意識の間で動揺する自意識過剰の知識人の混乱を読み取り、次第に〈日本的なもの〉に対する関心を強めていく横光の思考の道筋を読み取っている。

第三章から第五章はいずれも『旅愁』論であり、内容的に相互に関連している。まず第三章「『旅愁』における〈みそぎの精神〉と古神道」では、横光における古神道思想と『旅愁』中の矢代耕一郎への反映について、横光自身の「みそぎ」体験、笈克彦の古神道思想との差異、またラフカディオ・ヘルン『神国日本』や川面凡児からの影響等を踏まえながら、横光が西洋由来の文化を融和すると同時に近代科学を超克する思考装置として〈日本的なもの〉である古神道の創出を試みたとする。続く第四章「〈文学的象徴〉としての数学と『旅愁』」は、『旅愁』中の数学を象徴的記号として採用する横光の表現方法について、『旅愁』が原理的対立などの思想的問

○○○ 比文叢書の反響

題を数学で象徴的に表し、新たな世界認識を示そうとした実験的小説であると指摘する。第五章「科学主義の超克と古神道」は、シンポジウム「近代の超克」における近代科学認識の問題や三木清の言説を踏まえつつ、横光は三木清の提起した機械的知性の改造の主張を『旅愁』で古神道という思考装置によって日本人の心理の問題として試みたと論じ、横光における近代科学の超克が〈日本的なもの〉の追求と繋がっていたと分析する。

第一部の各章を通して、横光の小説表現の細部を読み取るよりも、その背後にある作家の思想が幾分性急に導出されている印象は時にあったものの、昭和10年代の横光が西洋的近代の危機を〈日本的なもの〉の追求によって超克しようとする方向＝〈近代の超克〉の志向へと傾斜していく思考上の経緯が、著者の分析を通して明快に示されている。

続く第二部においては、保田の評論が横光と対照的な〈原日本的なもの〉の探求であるという視点から、同時代の言説の動向にも十分に目配りをしながら扱われている。最初の第六章「日本の橋」とフッサールの現象学」では、保田の評論「日本の橋」について、京都学派の思弁との接点やフッサール現象学からの影響が検討され、保田の古典回帰が現象学的な意味での「反省」に基づいてなされており、西洋由来の哲学的思考の影響なしに当時の保田の〈日本的なもの〉への認識は存立し得なかったと論じている。続いて第七章「日本の風景観と文明開化批判」では、近代日本の風景に関する諸言説を踏まえて、西洋的な風景観に対する保田の風景観の位置を見定め、同時代の〈近代の超克〉の志向とは異質な文明開化批判＝〈近代の終焉〉の立場が、保田の風景論に顕在化していたと評価している。

保田の批評を検討する際にその古典評論へいかにアプローチするかは、彼の唱導した「日本浪漫派」の運動を検討する上で重要であると同時に難しい課題である。第八章と第九章では、その保田の古典評論を主たる考察対象としている。まず第八章「言霊論と「神人一如」」では、言霊論にあらわれた保田の思考について、保田が近世国学者の言説を媒介とすることで、古典精神の回復と同時に近代人の甦生を希求したと論じる。第九章「国学の再建による《文芸復興》と国民文化運動」では、保田による古典学としての国学復興を通しての「文芸復興」の試みについて、保田は文芸や文化などの現象世界における〈生成の理〉を共同体の原理として体系化し、天皇帰依の心情を国民にとっての〈自然〉なものとして創出しようとしたが、そこにはヨーロッパのルネサンスへの意識があったと評価する。

第二部の各章の論は、保田の近代主義への批判の展開を辿る際に多くの立論上の補助線を導入しているが、それら

が評者には興味深いものであった。例えば、保田の風景観を論じた第七章では、「日本新八景」選定問題から内藤湖南の「日本風景観」と昭和10年代の登山ブームに書き及んでいるし、第八章の保田の言霊論も、富士谷御杖の言霊倒語説や鹿持雅澄の言霊論はもちろん、中河與一の偶然文学論や戦時下の他の文学者による各種の言霊論にも言及している。保田の言説を、横光的な〈近代の超克〉志向との対比において、西洋由来の近代的思考そのものを否定しようとする方向＝〈近代の終焉〉の志向として定位するという著者の全体の結論そのものは、ある意味ではオーソドックスな図式のようにも思われたが、著者が個別の各章の分析で導入する観点は目新しく思われた。

以上、本書の内容を概観してきたが、ここで取り上げられなかった論点も含めて、本書は全体として、これまで日本浪漫派の文学運動とその背景としての昭和10年代の問題に対して関心を持ってきた評者にとっては、興味深い指摘が多かった。また、本書が取り扱っている戦時下の文学と〈日本的なもの〉といったテーマにおいては、時において対象となるテキストに対する性急な批評へと傾くことによって、そのテキスト自身の内包する論理とその論理を準備した同時代的背景への理解が不足する傾向が一般にある。しかし本書は、そのようなテキストへのアプローチにおいてもきわめて慎重な姿勢を保持しており、著者の本書中のテキストを取り扱う姿勢には、評者は共感を覚える点が多かった。

ところで、本書は〈日本的なもの〉を検討するに際して横光と保田の二者を特権化したわけだが、横光の数学的な象徴手法に倣って昭和10年代の文学と思想における言説空間を仮に円錐のイメージで捉えるならば、著者は、横光と保田の二者の志向をいわば二つの焦点（楕円を形成するもの）として設定することで、彼らの焦点が形成する〈日本的なもの〉に関わる切断面＝楕円の圏域を解析したと見ることもできるかもしれない。言うまでもなく、戦時下の文学と思想における〈日本的なもの〉の多様性は、横光と保田の二つの焦点に基づく切断面のみを通して全て把握し尽くせるものではないだろう。そして著者はそのことをよく承知しているように思われる。なぜならば、戦時下の〈日本的なもの〉を検討するための有効な焦点は、横光と保田以外にも、本書中において多く示唆されているからである。昭和の〈日本的なもの〉がより多くの焦点に基づく切断面を通して解析される中で、この問題機制は現代にも通じる分析上の有効性を、更に増すことになるであろう。

なお巻末に「昭和初年・10年代の〈日本的なもの〉に関する主要文献一覧」として、昭和初年から19年にかけての雑誌・新聞等に掲載されたエッセイ・評論また著書の中から、著

比文叢書の反響 ○ ○ ○

者の調査による〈日本的なもの〉〈日本的なるもの〉等の言葉が登場することが確認された資料が一覧形式で付されており、この時期の言説を検討する際に有用なものである。

本書は今後、横光利一と保田與重郎に関する個別の作家研究においてはもちろんのこと、昭和10年代を中心とする

文学と思想に関する研究においても、広く示唆をもたらすものとなるだろう。なお本書は、著者の九州大学大学院比較社会文化研究科へ提出された同題目の博士学位論文を改稿修正したものであり、花書院刊行の『比較社会文化叢書』中の一冊である。

【書評】 バールイシェフ・エドワルド 著
『日露同盟の時代 1914—1917
—「例外的な友好」の真相』 (比較社会文化叢書Ⅷ)
(花書院(福岡) (2007年11月))

『ロシア史研究』84、2009年6月より転載

長 縄 光 男

(横浜国立大学名誉教授)



1 「力作」である。そしてこれが留学生の著作だと言うことを勘案すれば、「超力作」と呼んでもよいだろう。先ず何よりも、著者の研究能力の高さと才能の大きさに敬意を表したい。また、本書が指導教官である九州大学の高田和夫教授をはじめ、周囲の方々の温かい援助にも多くを負っているという意味において、これはまさに「日露友好」の何よりの賜物である。併せて、この友好的協力関係にも敬意を表したい。

論述の対象となっているのは、一九一四年、第一次世界大戦の勃発時から、帝政ロシアが10月革命」によって崩壊するまでの三年余りの間のことで、そのピークをなすのは一九一六年七月の第四回日露協定の成立である。つまり、本書はこの「協定」の成立へ到るプロセスとそれが崩壊してゆくプロセスについての、きわめて綿密な考証である。しかも、日露両国、イギリス、ドイツ、そしてアメリカの外交要路はそれぞれの国の「国益」を背負って、そして国際資本、あるいは国内の資本家たちは自らの利益を図って、虚虚実実の駆け引きを行う複雑な有様が、極めて手際よく整理されているので、筋立てがはっきりとイメージすることができ、まるで一編の物語を読むようで、長い学術的著作

であるにもかかわらず、最後まで飽きさせることがない。

本書が基本的には外交史、あるいは、国際関係論の領域での研究成果であるにもかかわらず、私のように、ロシアの思想史研究や日露の人物交流史の研究を本来的な課題とする者が敢えて評者の役割を買って出たのは、まさに、この著作の持つ「人間臭さ」、そして、様々な人々の利害得失の計算が織り成す外交交渉の「物語性」に関心を寄せたからにはほかならない。勿論、この著作がフィクションだという意味ではない。ここでは「国益」なるものの論理的骨子が決定論的に解釈されるのではなく、事に携わる人々の思惑の絡み合いが生き生きと描写されているということに、この本の魅力があるのであり、評者が本書に惹かれるのは、まさにこの点にほかならない。

序論はこれまでの研究の総括とご自分の研究の独自性を明らかにすることを目的としているが、ここで俎上に上げられている諸家の研究の欠陥あるいは限界について、客観的に見てどれほどの妥当性があるのか、そのことはこの分野の研究成果に精通した人にしか分からない部分も多いと思われるので、門外の徒である評者としては特に口を差し挟むつもりはないが、しかし、次の件には著者の本書に籠めた意気込みが示されているという意味において、特に引用するに値すると思われる。

「〔従来の〕研究者の視線は、通常、日露接近の地政学的・文明史的・社会的な背景にまでは到らず、結局、日露関係は日露関係史にも日本史にもロシア史にも照明を与えない、歴史的に孤立したものとなっていたのである、つまり、一九一六年の日露同盟協約に到る外交交渉のプロセスを記述するだけでなく、そのプロセスを日露両国の社会政治的な生活という広い文脈の中に編みこむとが必要である」(16頁)。

2 本書の内容は各章に付けられた表題によって既に端

的に辿ることができるので、第一章以下、評者による注記も交えて、章立てを列記することからはじめよう。

第一章 世界大戦の勃発と日露同盟の「事実上の」成立〔一九一四年八月二三日、日本の対独参戦に到るまで——括弧内は評者による注記、以下同じ〕

第二章 日露軍事協力、日露同盟論の台頭と南洋諸島の問題〔同年八月下旬以降、ロシアへの武器供与の交渉開始、10月日本の東南アジアへの進出に対するロシアの容認〕

第三章 日本軍による〔ドイツの軍事要塞〕青島占領〔同年九月〕と東アジアにおける国際緊張の高まり〔英米は自本の大陸における権益の拡張として警戒、ロシアは敵国ドイツのアジアにおける拠点の喪失として歓迎〕

第四章 日支交渉期における日露関係——日露同盟論の具体化〔一九一五年五月「対華二ヶ条の要求」前後、大陸の経営における日露の提携〕

第五章 世界大戦の転換点—列強関係の再編成と日露接近の深まり〔同五年夏、「欧州戦争」長期化の様相と対独戦争におけるロシア軍の劣勢の明白化という状況下で、満蒙における権益の拡張を目指す日本〕

第六章 ゲオルギー・ミハイロヴィチ大公の訪日〔一九一六年一月〕と日露交渉の打診〔「日英同盟」を盾に日露の接近に消極的な加藤・石井 vs. 積極論者山縣・後藤・本野〕

第七章 同盟条約をめぐる日露外交交渉の開始〔同年二月、山縣派のイニシアティブのもとで〕

第八章 日露接近の政治的・経済的な舞台裏——外交交渉の終結に向けて〔同年春以降、日本からの軍需物資供与・経済援助の拡大を背景とした、日本による東清鉄道使用権・松花江航行権をめぐる日露の確執と交渉の大詰〕

第九章 日露両国における新協約の受容〔同年七月三日「新協約」締結を日露両国の政財界は歓迎。七月七日東京株式取引所主催の祝賀会と提灯行列〕

第十章 世界各国における日露親協約に対する反応——英米独の立場を中心として〔「日英同盟」の形骸化を恐れる英、中国における日本の立場の強化を恐れる米、「日露同盟」の延長上に「日露独同盟」を遠望する独〕

第十一章 日露同盟の絶頂〔一九一六年九月閑院宮の訪露、〕とその終焉〔一九一七年二月から10月革命〕—ロシアを巡る経済的な闘争〔帝政の弱体化と露の対独関係の変化に対応し切れなかった日本外交の失敗〕

第十二章 日露接近の論理とその文明論的な背景〔「西欧の没落」論、「第二列国家」論における日露画国の知的土壤の共通性〕

結論 第一次世界大戦期における日露接近とその特徴〔パクス・ブリタニカの弱体化という特殊な時代における「君主

制」と「東洋性」の再発見〕

3 日露戦争の終結（一九〇五年）後、南国の間には四回にわたり「協商」が締結されている。第一回が一九〇七年七月、第二回は一九一〇年七月、第三回が一九一二年七月、そして第四回が本書のテーマとなっている「協商」である。これらにはそれぞれの課題があるがゆえに更新されてきたのだが、しかし、そのいずれにも共通しているのは、不幸な戦争をむしろ奇貨として、以後両国は力を併せて中国へのアメリカとドイツの進出を食い止め、平和裏に満蒙の利権を分け合おうというモチーフである、その意味で、両国の「友好」的關係は日露戦争以後ずっと続いてきたといってもよいと思われるのだが、これを第四回の「協商」についてのみ「例外的」と称するのはなぜか。

著者は三次にわたる「協商」関係の構築によって作り出された「友好」の背後に、常に緊張が存在し続けたことを指摘する（19頁）。即ち、ロシア側は極東における自国軍事力の弱体化した中で、日本が大陸へ進出することにおびえていたのに対して、日本側にはポーツマス講和条約への不満がある一方、ロシアからの復讐戦争への恐怖もあった。このような潜在的な相互の不信感・脅威感を一掃したのが第一次世界大戦であった。当初こそ、日本側にはこの機に乗じてロシアを背後から叩くべしと言う意見がないわけではなく、これが逆にロシア国内の対日脅威論を煽ることにもなったが、極東における「日英同盟」とヨーロッパにおける対独「英露同盟」「英仏協商」という「国際政治的なコンビネーション」（24頁）の中で、日本が対独参戦を決意するにおよび、ロシアの世論に安堵と感謝の念が広がり、日露接近への前提が出来た。以後、日本側からの武器供与（質・規模・時期）と、その見返りとして東清鉄道の利用権と松花江の航行権に関するロシア側からの譲歩とを巡り、厳しい交渉が続きはしたが、結果的には両国にとって満足の行く形で「協商」が成立した。この間、両国の皇室の一員が相互に訪問しあい、「友好」の実を両国の内外に闡明した——これが著者の言う「例外的な友好の真相」である。

4 第四回「協商」にいたる道筋において日本側には積極論と消極論があった。加藤高明を中心とする外務省は日露の接近が「日英同盟」に抵触しかねないことを危惧し、対露関係は従来からある第三回の「協商」で事足りるという立場であった。これに対して山縣有朋を中心とする陸軍は日露の接近に積極的であった。両派が対立する中で、最終的には山縣・陸軍の積極論が勝利する、というのが本書のストーリーである。

この大筋は首肯するとしても、本書が日露接近消極派（対英関係重視派）と積極派（対独関係重視派）の対立を「自由

○○○ 比文叢書の反響

主義」対「保守的ナショナリズム」というイデオロギー的対立と捉えていることには疑問がある。

十九世紀後半に始まる近代日本の外交を大きく振り返った時、ヴィクトリア時代の大英帝国の勢威を思えば、対英外交中心主義が日本外交の主流を占めていたことは当然であったが、しかし、同じこの十九世紀の後半は、ドイツとアメリカが世界政治の舞台に登場してきた時代でもある。加えて、この時期、クリミア戦争の傷を癒したロシアが復活し中央アジアや極東に進出を開始し、他方、極東では日本も大陸の経営に乗り出しつつあった。

このように近代の初期以来ヘゲモニーを競ってきた英仏の間に（ロシアや極東の日本もさることながら）主としてドイツが割り込んできたことによって生じたヨーロッパの政治経済の地殻変動を、しかるべきところに収まらせたのが第一次世界大戦であったとすれば、大戦前夜の日本の対ヨーロッパ外交の中に、一方で帝国主義化しつつある日本の後見人たるイギリス重視というモチーフと並んで、他方に、英仏を凌ぎつつある国、ドイツを無視できないとするモチーフも存在していたことが分る。この相反するモチーフが加等+石井 vs. 山縣+井上+後藤+本野という構図として現れたのである。ここで、日本の陸軍はドイツ（プロイセン）陸軍に多くを負っていること、そして、山縣が陸軍の総帥であったことが想起されるべきである。このような対立を「自由主義」と「保守的ナショナリズム」の対立と呼ぶことは出来ないだろう。

加えて言えば、両者の対立の背後には資本の対立もあったとも見るべきだろう。「日英同盟骨髄論者」の加藤は岩崎の女婿で、政界では「三菱の番頭」と異名されていたが、大戦の勃発当初、ロシアへの武器供与を委嘱された「泰平組合」なる財界の集まりに、「三菱」の名前はない、これに対して「組合」で中心的な役割を演じた大倉組が旧財閥に伍して一大財閥を形成し始めるのは、まさに第四回「協商」の成立過程でのことであった。以後、大倉組は陸軍の大陸進出に寄り添うように、財閥としての基盤をより確かなものにするのである。山縣が陸軍を、後藤が満鉄を掌握していたことと大倉組の財閥としての成長とが無関係であるはずはない。

5 親独派の山縣らが日露接近を唱えにいたる理由は一見分かりにくいだが、この疑問はまずは欧州における戦況の

変化によって説明される。開戦当初、英仏露を相手としたドイツの圧倒的不利を予測していたものの、そのドイツがロシアを相手とした東部戦線ではロシアを圧倒し、英仏を相手とした西部戦線では互角に戦うのを見たとき、親独派は「日英同盟」は必ずしも国益にそぐわないと声高に言い始め、日露接近の重要性を説き始める。これは一九一六年二月ごろのこととされているが（二一六―二一八頁）、この時期はロシア軍が東部戦線で総崩れした時期と符合する。

欧州戦線のこうした戦況をにらんだ親独派の日露接近論の背後にあるのは、彼らが戦後の国際関係に思い描いていた「日露独 vs. 英米」という構図だった。そして、この構図を思想的に裏付けるのが、このころ日本の知識人の中に流行っていた「西欧の没落」論であった、と著者は述べる。著者の創見が披瀝されるのはまさにこの点である。つまり、著者は「日露協約」を英仏より遅れて近代化を成し遂げた「第二列国家（日露独三国）」の連帯の一環として位置づけているのである。例えば、こんな記述がある。

「後藤新平の姿に最も鮮明に体现された西欧文明の没落論は日露同蘆に進化しうる日露親善の構想として登場し、山縣有朋の日露同盟論となり、第四回の日露協約の締結を導いたと考えられる」（340頁）。

太平洋戦争前夜、日本の論壇の一部が日本文化に西欧とは異なる独自の価値を認める立場から、「欧米何するものぞ」といきり立ったことがあった。そのような議論は「近代の超克論」と呼ばれたが、著者の指摘によれば、早くも明治末から大正初期にかけて、すでに「近代の超克論」に似た議論が行われ、それが外交方針に影響を与えていたということになる。やがて語られることになる「近代の超克」論とこの時期の「近代批判」との間にどのような差異があるのか、また、両者はどのように連結しているのか、これらは著者に聞くような問題ではなく、むしろ私たち自身が考える問題であるが、いずれにしろ、今まで注目されることのなかった比較的マイナーな評論家たち（長瀬鳳輔、茅原崋山、遠藤吉三郎、鹿子木員信、大庭柯公、内田良平、そして正教徒・昇曙夢など）がここで言及されているのは、われわれにとっては盲点を衝かれたようなもので、大いに啓発された（328―340頁）。私たちは本書によって大きな課題を与えられた、と言うべきだろう。

【書評】 バールイシェフ・エドワルド 著 『日露同盟の時代 1914—1917 —「例外的な友好」の真相—』

『西洋史学論集』46、2008年より転載

井 竿 富 雄

(山口県立大学国際文化学部准教授)



一

外交史研究は近年力作が量産されているように感じられる⁽¹⁾。そのような学問領域全体の勢いの中で、本書もまた刊行された。本書は、著者が九州大学に提出した博士論文がベースになった著書である。

本書の構成は、以下のようになっている。

序論 研究史と課題の設定

第1章 世界大戦の勃発と日露同盟の「事実上の」成立

第2章 日露軍事協力、日露同盟論の台頭と南洋諸島問題

第3章 日本軍による青島占領と東アジアにおける国際緊張の高まり

第4章 日支交渉期における日露関係—日露同盟論の具体化

第5章 世界大戦の大転換点—列強関係の再編成と日露接近の深まり

第6章 ゲオルギー・ミハイロヴィッチ大公の訪日と日露交渉の打診

第7章 同盟条約をめぐる日露外交交渉の開始

第8章 日露接近の政治的・経済的な舞台裏—外交交渉の

終結に向けて

第9章 日露両国における新協約の受容

第10章 世界各国における日露新協約に対する反応—英米独の立場を中心として

第11章 日露同盟の絶頂とその終焉—ロシアをめぐる経済的な闘争

第12章 日露接近の論理とその文明史的な背景

結論 第一次世界大戦期における日露接近とその特徴

序論において、著者は第四次日露協約、通称日露同盟に関する日本・ロシア(ソ連時代のものも含まれる)・その他の国の先行研究について幅広く言及する。そして、著者は本書において採る方法論を以下のように示している。

「1916年の日露同盟協約に至る外交交渉プロセスを記述するだけではなく、そのプロセスを日露両国の社会政治的な生活という広い文脈の中に編みこむ」(16頁)

「政治学的なアプローチよりも、「人間」と「社会」を主要対象とする古典的な歴史学的なスタンスを取り、その結果、本研究では政治はあくまでも社会生活の一部として位置づけられている」(16-17頁)

以上のように、著者は日露同盟という外交史的な事件を取り扱いつつ、単に政治史・外交史の枠組みで叙述をするのではないことを宣言する。著者が政治・外交をも全体史の一部として取り扱うという意欲が見て取れる。この結果、著者の論述の中では、政治・外交に関する文書のみならず、各国新聞の記事、日露両国の知識人の著作や発言なども取り扱われていくことになる。

本書で著者は、まず日露接近が日露戦後すぐから始まっていたことを確認する。そして第一次世界大戦勃発により、中国をめぐる国際的な緊張が高まっていたことが指摘される。アメリカの中国進出、ロシアとドイツとの対立関係などが、日本とロシアを互いに接近させようとしていたこと

○○○ 比文叢書の反響

が明らかにされる。この過程では、ロシア側が日露同盟を望んだ理由として、日本の再北進阻止と南進への誘導という目論見があったことが論じられている。

第一次世界大戦勃発後、実務的なレベルからさらに日露の急激な接近が進展した。ロシア側は、大戦遂行のための武器が必要であった。そのため、日本製の武器購入を申し出た。この当時ロシアは、最大の武器供給国は日本である、という状態になっていた⁽²⁾。この武器供給を増加するためにロシア側が使節を派遣して日本と交渉に当たっていた。本書ではロシア軍人ゲルモニウスの日本派遣と、表面上は非政治的な君主同士の外交だったゲオールギー・ミハイロヴィッチ大公の訪日について詳細に述べられている。

この反面として、著者は日本政府内部の意見の相違についても頁を割いて論述している。日露同盟締結に期待をかける元老山縣有朋・駐露大使本野一郎らのグループと、従来どおり日英同盟を中核として外交戦略を考えるべきであるとする、石井菊次郎や加藤高明らのグループが存在していたのである。そして、日露両国はこのような矛盾をはらみつつ、中国、就中満州における利害の一致で徐々に提携関係を深めたことを著者は論じている。とはいえ、このような日本政府内部のぶれは、軍事的協力をも含む「同盟関係」へと日露間を移行させるのには高いハードルであったことも指摘される。

この中で特に注目されるのは山縣有朋の動きであった。山縣は日露戦争以前は日英同盟に賛同する立場であったが、このときは日露接近に与していた。1916年、日露の武器供給交渉で日本側がロシア側の要求に難色を示したとき、山縣はロシア側の要求を満たすべく奔走していたのである⁽³⁾。

かくして1916年、第四次日露協約、通称日露同盟が締結された。第一次世界大戦期、日本から武器供給を受ける中での同盟条約締結には、ロシア側でも難色を示す動きがあった。駐日大使マレーフスキーは、ロシア側から与えるものが大きすぎると難色を示したが、結果は彼の更迭だった。このような政策の流れは、ロシアの武器調達によって、イギリスによるロシア財政の掌握を危惧したロシア皇帝自らの意向でもあったことを著者は明らかにしている。しかしこのような政策転換も含めた日露両国の努力は、ロシアの二月革命で消滅した。著者は本書の後半でこの問題について、「ロシア革命という終末は日本の政治家によって全く予想もされていなかったシナリオであった。その理由を探ってみれば、日本側はロシア内政に影響を与える手段をほとんど持っていなかったことが分かる」(324 - 325頁)と述べている。

本書後半では、帝政ロシアと日露同盟の崩壊を見届けた寺内内閣のことに触れた後、主として日露同盟に関する日露双方・および関係国の反応について論じている。日本国内で、日英同盟中心論を唱えるものまで日露同盟締結を歓迎していたという同床異夢状態の指摘(256頁)がある。反面、ロシアにおいて日露同盟はさほど関心をもたれなかったが、日露同盟を歓迎した勢力が「反ドイツ=反皇帝」の含意を持たせていたことへの注目(262頁)もなされている。また第三国での反応として、当時日露両国の敵国だったドイツだけではなく、通説的に日露同盟が仮想敵国と考えていたアメリカでも日露同盟は注視されていたことが述べられている。

最終章では、日露両国の知識人が、同時代的にどのような状況を認識していたかが語られる。著者の造語である「第二列国家」⁽⁴⁾ 同士の同盟が、いかなる意味を持って語られたかが、日露両国の議論の中から引き出される。前述した日本の論者の同床異夢状況、そしてロシアでの、日本は「異教国」だから「反キリスト教国」より安全だという議論は注目される。

著者は本書全体の結論として、「日露同盟の特徴はパクス・ブリタニカの弱体化という特殊な時代における君主制および「東洋性」のいわば再発見にあった」(360頁)という壮大な構図を描く。著者は「日露が近代化の面が多数の共通点のある、いわば同じような「東洋」であったことは、日露接近の自然な文明史的な基盤であった」(同上)と述べて、日露同盟の文明史的な基盤を強調する。しかしながら帝政ロシアは既に崩壊に瀕していたため、つかの間の同盟関係はすぐに崩壊し、「第二列国家」同士は一時接近したとはいえ、「世界首都」としてのロンドンの代わりにニューヨークが登場しはじめると、両国のエリートは次第に「新大陸」に目を向けるようになったのである」と本書を結んでいる。二

本書の意義は、やはり日露同盟を世界史的な見地から一度鳥瞰し、再検討しようとしたところにあると評者は考えている。それは、単に政治史・外交史的な叙述のみに留まらず、著者が同時代人の発言を積極的に掘り起こすことによって、日露同盟を同時代的にどのように位置づけるかということに腐心した点に求められるだろう。日本の「日露同盟歓迎論」が同床異夢だったことと、ロシアの「日露同盟歓迎論」が内政上の文脈から語られていたことは、少なくとも日露双方からの視点がなければ同時には指摘できない。また、通説的にも既に日露同盟の仮想敵国として語られていたアメリカにおいて日露同盟を警戒する議論があったことや、日露戦争で日本を財政的に支持したジェイコブ・シッ

フが、日露接近に憤慨して対独支援に転じたことなど、各国の反応を丁寧に描きこむことで、世界史の中での日露同盟の位置づけを確認しようとする努力がなされているのである。

また著者が本書の副題となっている「例外的な友好の時代」としての日露同盟関係の模索を扱ったことは、私たちが通俗的に考えている「ロシア脅威論」が日本外交史の基調ではないことを明らかにする意味でも有益だろう。「帝政ロシア（日露戦争を頂点として）」と「ソ連（第二次大戦後半から冷戦期）」を無自覚につなぐイメージへの異議申し立てである。著者は「史上稀に見る薄倖な同盟」⁽⁵⁾としてだけではない日露同盟関係史を描き出そうとしたのである。

ただ反面、著者の意気込みにもかかわらず評者には多少の疑問も見受けられた。読みがはずれている可能性もあるが御容赦いただきたい。

一つは叙述の問題である、著者は政治史・外交史をも one of them として論述しようという意欲的な取り組みを行ったが、全体としてはやはり外交史的な叙述が中心となっている。日露同盟条約というものが中心になっている以上、この結果はどうしても否定しがたい。また、このようなテーマを扱うにあたっては、政治史・外交史的な叙述が多くなるのは一概に否定すべきものではないと考えられる。

また著者は「欧米諸国はロシアに対して「二重のゲーム」を繰り返していた一方、日本の対露政策は素朴でナイーブとでもいうべきところがあったことが分かる」(324-325頁)と述べている。しかし、日本のおかれた状況を見ると必ずしもそうとは言いがたい。ロシアは日本にとって、わずか10年前は敵国であった。日英同盟骨髄論から日露同盟関係への進行に慎重な意見があることは当然の前提である。石井菊次郎は後になっても、「歴史は繰り返す」として日露同盟の決定に不満を述べていた⁽⁶⁾。この後、1917年の帝国国防方針ではなおロシアは敵国として想定されている。反面、日本はシベリア出兵に容易に踏み出しえなかったこともある。日英同盟締結にしても、直前まで日露協商論との折り合いはついていなかったことを考えても、日本の綱渡り的な状況が分かる⁽⁷⁾。むろん、日英同盟に対しても全幅の信頼を置いていたわけではない。1911年の日英同盟改定でアメリカが同盟の防衛対象から脱落したことに落胆したのは、徳富蘇峰だけではないはずである⁽⁸⁾。とはいえ、第一次世界大戦後と異なり、日本にはまだ「二重のゲーム」をやるほどの外交的な余裕は存在していなかったのではないかと、という感が評者にはある。

また、日本における日露接近への不安は、財政面にもあっただろう。第一次世界大戦末期になると、著者も指摘して

いる通りロシアは財政的に逼迫し、金本位制では致命的な「金現送」までするに至った。これに日本海軍がかかわったことは既に先行研究がある⁽⁹⁾。日本の対露貿易はかなり大きかったことは本書でも指摘されている。しかし財政破綻しかかっている国に対する接近はどう考えてもリスクが大きい。日本に対露武器売却への消極論がある背景とは言えないだろうか。

著者は「日露が近代化の面が多数の共通点のある、いわば同じような「東洋」であったことは、日露接近の自然な文明史的な基盤であった」(360頁)として、日露間の「文明史的」な側面を強調している。前述の蘇峰も、日露戦争の原因たる満州・韓国問題は平和裏に解決できたはずだと論じている⁽¹⁰⁾。とはいえ、ロシア側の知識人は日本を「異教国」として、同列にはとらえていない。逆にレーニンが日露戦争期「進んだ日本と遅れたロシア」という構図で両国をとらえていたことも有名である。本書で触れられた茅原華山は、むしろ戦争による「大英帝国崩壊」に期待していたことを指摘する議論もある⁽¹¹⁾。日露同盟の崩壊を見ることになった寺内内閣が、親露的な人物を擁していたのも事実だが、反面その「親露」は外交戦術上のものであったことは、本書自らが明言している(312頁)。その意味で言えば、本書序論にあるロシア側の先行研究が、日露同盟関係を「やむをえない同盟」(9頁)と述べているのは適切であろうとも感じられる。また、日露同盟関係締結の、社会的影響はどうだったのだろうか。本書はロシアで日露同盟条約締結がさほど関心を引かなかったこと、東京での日露同盟締結祝賀の群衆が「サクラ」であったこと(244頁)を指摘している。

あと、本書が言及していた第一次大戦期の西欧批判は、日露接近以外の方向性を向くことも考えられる。本書で日露同盟を歓迎している長島隆二は、のちに第一次大戦の連合国の大義の欺瞞性を批判しながらシベリア出兵を促進する議論を展開している⁽¹²⁾。また本書最終章で登場する北大教授遠藤吉三郎は、その著書で日本の対西欧一辺倒を批判し、ロシアの「野蛮性」評価と中国の多様性への理解を説いている⁽¹³⁾。反西欧への志向性は、日本外交史の中で一貫して傍流として(あくまで傍流であることも重要だが)基調をなし続けていくものである。

三

最後に、本書から評者が触発された点について述べたい。第一に日本にとってのロシア、ロシアにとっての日本は何だったか、ということである。日本のロシア像とは、シベリア出兵期には一度だけ、革命で没落して苦しむイメージになったことはあろうが、一貫して謎めいた軍事的強敵であっただろう。ソ連成立以後は「敵対的イデオロギーを

○○○ 比文叢書の反響

持つ軍事的脅威]である。大庭柯公ではないが、日本人にとってロシアは謎なのである⁽¹⁴⁾。反面、日本にとってロシアは絶対に付き合わねばならない存在であったことも確かだろう。日露戦時に、当時の日本当局が「征露」の文字利用を戒めたこと⁽¹⁵⁾はその象徴的な出来事である。シベリア出兵のときも、日本政府はロシアへの友好関係を強調した宣言文を發した。

これらの奇妙なロシア像・ロシア観が、本書登場人物のその後の動きに現れるように、評者には感じられた。本書後半で登場する軍人黒澤準、中島正武、あるいは寺内正毅内閣の関係者、そして元老山縣有朋は、すべてシベリア出兵にかかわるのである。特に注目されるのは本野一郎・後藤新平である。駐露大使本野一郎は寺内内閣の初代外相として強硬なシベリア出兵論を唱え事実上更迭された。後を襲った後藤新平はアメリカの対日出兵提議に興奮し、シベリア出兵実現に奔走した⁽¹⁶⁾。本野はその後すぐ死去するが、後藤は後に一転して対ソ国交回復に努め、「赤くなった」と攻撃されても意に介さずソヴィエト・ロシアとの提携に尽力した⁽¹⁷⁾。後藤において、シベリア出兵と対ソ復交の間に断絶はないように感じられるのである。

先行研究として著名な吉村道男『日本とロシア』では、日露同盟史を「シベリア出兵前史」としてとらえるという立場が闡明されている。評者は本書によって、この時代を「日露間の戦間期」といえないかどうか考え始めた。通常戦間期とは第一次世界大戦と第二次世界大戦との間をさしているが、日露間には必ずしもこれがあてはまりにくい。日露協約一同盟の時代は、短期間だが日露戦争からシベリア出兵までの「戦間期」ととらえることも可能なのではないか。日露間は、日露戦争という、総力戦への過渡期ともとらえられるような激しい戦争を経て、利害の一致する帝国主義国家間の関係へ変貌した。ここに、たとえやむを得ざるものとしても「例外的な友好関係」が現出する余地があったのではないかと考えられるのである。そしてこの関係はロシア革命で崩壊し、次には「日ソ関係」という緊張感に満ちた外交関係が登場していく、という流れである。もとよりこれは評者の思いつきに過ぎず、厳密な検証を欠くため、これ以上は論及できない。

評者は近年の外交史研究の隆盛ぶりに追いついていないとはとてもいえない。そのため本書に対しては的の外れた指摘や批判をぶつけた無礼もかなりあるだろうと考えている。しかし、各国の史料を博搜した重厚な歴史叙述を心がけた本書に対して、評者は大きく意欲をそそられた。この点は明らかにしておきたい。本書著者のこれからの発展が期待

される。

註

- (1) 拙稿「(書評) 服部龍二・土田哲夫・後藤春美編著『戦間期の東アジア国際政治』中央大学出版部、2007年」『季論21』創刊号(2008年夏号)。
- (2) 保田孝一「明治時代の日露関係」原暉之・外川継男編『スラブと日本』弘文堂、1995年所収。
- (3) 伊藤隆編『大正初期山縣有朋談話筆記・政変思出草』山川出版社、1981年。
- (4) パールィシェフ・エドワルド「国際政治の力学—システム論の視点から—」『比較社会文化研究』(九州大学比較社会文化研究学府)16号、2004年。これは、「後発帝国主義」の概念を批判し克服する目的で出されている。
- (5) 芦田均の言葉として吉村道男『増補日本とロシア』日本経済評論社、1991年の中で引用されている。
- (6) 石井菊次郎『外交余録』岩波書店、1930年。
- (7) 千葉功『旧外交の形成』勁草書房、2008年。
- (8) 徳富蘇峰『世界の変局』1915年。
- (9) 斎藤聖二「日本海軍によるロシア金塊の輸送1916・1917」『国際政治』97号、1991年。
- (10) 前掲『世界の変局』。
- (11) 孫国鳳『茅原華山と近代日本』現代企画室、2004年。
- (12) 拙著『初期シベリア出兵の研究』九州大学出版会、2003年。
- (13) 遠藤吉三郎『欧洲文明の没落』富山房、1914年、および『西洋中毒』二酉社、1916年。
- (14) 大庭柯公『露西亜に遊びて』大阪屋号書店、1917年。
- (15) 有馬学『「国際化」の中の帝国日本』中央公論社、1999年。
- (16) 細谷千博『シベリア出兵の史的研究』岩波現代文庫、2005年、厚暉之『シベリア出兵』筑摩書房、1989年を参照されたい。
- (17) 後藤新平「日露問題に就て」『哈爾濱学院史』国立大学哈爾濱学院同窓会、1978年所収。このことについては、駒場裕司『後藤新平をめぐる権力構造の研究』南窓社、2007年も参考になる。

※本書評はソ連・東欧史研究会(2008年7月12日、九州大学六本松地区)で、長縄光男氏とともに行った書評会での報告をもとにしている。専門外の報告を受け入れてくださった皆様に厚く御礼申し上げたい。

(花書院、2007年)
397頁、本体2,500円)

【書評】

松永典子『「総力戦」下の人材養成と日本語教育』

(花書院 2008年2月20日発行 202頁 定価 2500円)

『地域健康文化学論輯』創刊号 (2009年9月) より転載

徳永 光展

(福岡工業大学社会環境学部准教授)

1. 概要

本書は、第2次大戦下に日本が南方占領地とした「マラヤ(現在のシンガポール、東マレーシア、西マレーシア)、陸軍が軍政を布いたインドネシア地域のうち、陸軍25軍占領地(スマトラ)、陸軍第16軍占領地(ジャワ)と海軍占領地、フィリピン、ビルマの各地域」(2頁)を対象に、「戦前・戦中の日本語教育の組織的実践を「人間形成」という観点から再検討」(3頁)しようという目的の下に執筆されたもので、序章、終章の他、7章で構成されている。

「序章 多様化の波と人材養成」(1頁~14頁)において、著者は、今日における日本語教育が「専門性」重視から、「人間性」「教育力」をも重視する方向性へと転換されてきている」(5頁)現状、換言すれば「言語・教授法といった知識の習得、異文化の理解・受容に止まらず、言語運用、異文化調整、社会性、社会文化能力、対人関係能力といった幅広い「人間性」を身につけることが求められてきている」(5頁)という認識に立ち、そのような形での「ニーズの多様化」(5頁)は歴史的事実を掘り返せば、「1930年代後半以降、中国内の日本占領地」(5頁)にも、「マレー系、中国系、インド系、土着の民族といった異なる種々の民族が混在」(6頁)していたマラヤ(「シンガポール(当時は「昭南特別市)」とマレー半島の11州(ジョホール、ヌグリスンピラン、マラッカ、スランゴール、パハン、ベラ、ペナン、ケダ、トレンガヌ、クランタン、プルリス)」(1頁)にもすでに存在していたとしている。よって、「当時の「南方」占領地における多文化・多様化現象は、ある意味では現在の国内の多文化・多様化を前提とした様々な教育現場の状況と相通ずるものがある」(7頁)と「問題の所在」(7頁)が総括され、その教育の果たした「功罪」(8頁)を明らかにしようという意図が述べられるのである。

その上で、著者は、「当時の日本語教育自体は「日本精神」

の普及という日本のナショナリズムの扇動に利用されたが、日本式の「錬成教育」は一部の人々には今日に至るまで多大な波及効果を与えて」(8頁)おり、「日本の占領地域へ派遣された「日本人」(軍政要員、日本語教師、民間人)自身が受けた」(8頁)「皇国臣民としての資質を錬磨育成することの意であり、国民統合・国民教化の理念・方法論を含む包括的概念」(9頁)としての「錬成」(8頁)について説明していく必要性を認識するに至った」(8頁)と言う。そこで、「錬成」を「総力戦下の人間形成」という観点から捉え直す必要性を提起」(11頁)し、さらに「錬成」には異文化に向き合うために必要な訓練が内包されていた点を明らかにする」(12頁)としている。

まず、「第1章 「総力戦」下の人間形成——「拓南塾」を中心に——」(15頁~39頁)では、「南方」諸地域の拓殖に必要な人格と実力とを備えた中堅人物養成を目的とする」(15頁)「拓南塾」が「大東亜共栄圏確立」「新秩序の建設」といった国策推進の役割を担っ」(15頁)てはいたものの、その「教育理念・教育方法には、日本語教育要員を含めた「南方」派遣要員、あるいは中国占領地派遣要員の「錬成」とは異なる要素があったのではないか」(16頁)との仮説の下、「日本による対東南アジア開発援助に参加した若者の源流として青年海外協力隊になぞらえられている点」(16頁)、「当時一流の講師陣が終結されている」(16頁)点、「戦時下の異国の地で、現地の人々と生活を共にし、その国づくりに貢献しようとした体験自体が非常に稀有なものである」(16頁)点に着目の上で分析が進められる。「戦局の変化に伴い、「南方」進出者に対しては官・軍・民を問わず「模範的指導者」たるべきことが絶対条件として求められていくことになる」(18頁)中で、「不言実行、文句を言はないで飽く迄仕事をやり遂げる」、「人間が出来て気風が備はつて居る」、「精神的訓練の行届いた確りした人間」(18頁)を錬成によって

○○○ 比文叢書の反響

送り出すことが求められていた。「日課」(25頁)は「規則正しく履行」(25頁)され、「内地訓練科目」(25頁)は、「修身、国史、国漢文、柔道、教練、体操、勤勞、法制大意、經濟大意、植民政策、南方經濟地理、南方史、南方事業經營一般、南方土俗学、熱帯衛生等、語学(マレー語其他外国語)、実務実習」(25頁)と「3か月の現地訓練」(25頁)であったが、「塾の綱領には、第1項「南方を墳墓の地と覚悟せよ」、第2項「日本人として完成し内外人の模範たれ」」(26頁)とあり、「国策にそった「完成した日本人」「模範的指導者」」(26頁)育成が目指され、塾生を崇高な感情の持ち主に育て上げていたのであった。

その上で、著者は「「拓南塾」—「興南鍊成院」—「大東亞鍊成院」への機構変更は、教育課程自体にどのような変化をもたらしたのであろうか」(28頁)との問いを掲げている。「「興南鍊成院」は「南方」占領地行政に携わる文官、及び民間の「南方」進出者を「鍊成」する機関」(29頁)として発足し、「「鍊成」が「訓育」「術科」「学科」によって構成される形とな」(29頁)ったが、「訓育」が最も重視されたことから、「当時、海外派遣要員の養成において「道徳心・人間性涵養」が最重要課題とされていた」(29頁)との見解が述べられる。同時に「「拓南塾」から「興南鍊成院」への機構の変化においても基本的な教育姿勢に変更はなかったのではないかと考えられる」(32頁)ものの、「「拓南塾」時代の科目としてあった英語や他の言語は科目から消え、語学はマレー語に特化してきている」(32頁)点が注目し得る点だとしている。また、その後の「大東亞鍊成院」にあつては、鍊成目的が「南方諸地域ニ於ケル国家的用務ニ挺身スベキ中核的人物ヲ鍊成ス」(33頁)と時局を反映した切迫した表現に変わり、「南方事情」(34頁)「珠算、簿記」(35頁)、「特技訓練、芸能」(35頁)などといった科目が加わった上に、語学が「英語、馬來語、泰語、緬甸語」(35頁)と多様化した様子についても言及されている。

以上のような調査を踏まえ、著者は「「拓南塾」の教育理念・教育方法には、異文化接触におけるコミュニケーションの方法と柔軟な思考方法を身につけることに資するものがあつたと言えるのではないだろうか」(38頁)とし、「当時の人材育成が戦後のその人自身の生き方に作用するような機能があつた」(38頁)点にも想像を巡らせるのである。

「第2章 占領地派遣日本語教育要員の「鍊成」——興亜院を中心に——」(40頁～61頁)は、第1章の続編として「日本語教育要員の「鍊成」を含めた占領地派遣要員の「鍊成」という大きな枠組みを捉え、合宿形式を伴わない講習会形式の日本語教員の「鍊成」についても考察していく」(40頁)とした上で、「対中国要員の「鍊成」にあつた興亜院を軸

に、日本語教育要員の「鍊成」の目的が従来考えられてきたように「模範的指導者」養成に置かれてきたのかどうかを検証していく」(40頁)ことで「異民族・異文化に向き合うための人材がどのように養成され、その人材養成が占領地で実際どのような機能を果たしたのかという点」(41頁)を明らかにしようとする。

そこで、雑誌『コトバ』を使用して(45頁～49頁)、合宿ではなく講習会として実施された海外進出日本語教師養成講習会の様子が概観される。また、「対占領地派遣日本語教育要員の「鍊成」に関しては、基本的には中国占領地は興亜院(のち大東亞省)が担当し、「南方」占領地は、文部省(「振興会」)が担当していた」(50頁)が、「日本語教授に関する実践的な内容が軽視されている」(51頁)という共通点があつたと言う。

また、「1941年4月に設立された」(56頁)「興亜院やその他関係機関の官吏、興亜団体のメンバー、日系企業の職員など対中国要員のエリート」を「鍊成」するという性格を有する」(56頁)「興亜鍊成所」(56頁)は、「1 国策にそった「指導者」の鍊成という目的の下、鍊成の基本に「訓育」が据えられている。2 あらゆる環境への適応を考慮し、心身の鍛錬、実務的な訓練、学問上も実学が重視されている。3 現状の中国との関係性を良好に保つことに細心の注意を払おうとする意図が見られる」(58頁)という3点の特徴を持っていた。換言すれば、「開戦後「大東亞の指導者たるべき日本像」が殊更に強調され、それが極端に機能した場合には、中国占領地や「南方」占領地向け官吏養成・日本語教師養成に見られるように、現地住民に対する「指導者」としての「日本人」像が掲げられ、「多様化」への対応という視点を欠いていくことになる」(60頁)のであつた。

「第3章 「文化政策」としての日本語教育」(62頁～75頁)では、「戦時下の日本語教育が「文化政策」として行われた背景を念頭に置きつつ、当時の日本語教育の理念的背景を明らかにする」(62頁)ために、「マラヤの場合、当時の「文化工作」にある程度先導的役割を果たしている側面がある」(63頁)「当時の日本語教育関係で代表的な雑誌である『日本語』」(62頁)〔日本語教育振興会編纂・発行〕(63頁)が取り上げられる。すると、「「文化政策」・「文化工作」として「日本文化」を対外的に進出していこうとした時、「日本人」は初めて「日本人」自身の問題として「日本文化」とは何かという問題を突きつけられ」(73頁)、「対外的な問題であつたはずの「文化政策」は、はからずも「日本人」自身が「日本文化」を確立し、「日本文化」に誇りと自信を持つべきだという内側の自省へと跳ね返ってきた」(73頁)ことが分かるというのである。『日本語』における「文化人」の言説」(73

頁)は「『日本文化』に抱く盲目的な自負を窺わせる言説」(73頁)、「日本人」としての自負は保ちながらも、同時に文化提携や文化交流といった視点から異文化を尊重する立場の言説」(74頁)、両者の中間形として「いたずらに『日本文化』を称揚するにとどまらず、西洋文化に学ぶことで『日本文化』の発展を期している」(74頁)言説の3つに分類できるが、いずれにしても「アジアの指導者としてあるべき理想の『日本人』像、理想の『日本語』、理想の『日本文化』の構築を企図する国家的・政治的理念が投影されている」(75頁)のであり、「対外的に『日本語』・『日本文化』を普及するには、『日本』という国家の政治力、『日本人』としての国民性から必然的に逃れることはできない」(75頁)し、「『日本語』『日本人』『日本』の三位一体性は堅固にして崩れることはなかったと言わざるを得ない」(75頁)とまとめられている。

「第4章 「南方」派遣日本語教育要員の「錬成」」(76頁～92頁)は、「『南方』占領地における日本語教育の「多様化」の背景にあったシステム、理念といった枠組みを探るという目的のもと、特に「錬成」という観点から実施された「南方」派遣日本語教育要員(日語教育要員、文教要員とも言う)の養成に注目」(76頁)し、「『南方』派遣日本語教育要員に対する教育理念・方法論の扶植に「錬成」が果たした機能を明らかにするために、日本語教育要員養成の目的及び方法を考察」(77頁)しようとするものである。

日本語教育振興会が請け負った日本語教師の募集・選考・養成(80頁)は、「第一に、言語学上或いは文法上相当の専門的知識を持っているばかりでなく、教授法においても特殊の技術を心得ていること。第二に、思想の傾向と人物人柄が指導者としてふさわしいこと。つまり、真に日本精神に徹し、自ら日本人として恥ずかしくない生活態度を堅持し得る者であること。第三に、身体的に頑健であること」(84頁)といったように、「理想としては、『言語教育のプロ』としての技術と素養が望まれながら、現実的には『言語教育のプロ』を育成して送り出すシステムは出来上がっていなかった」(80頁)と言う。なぜならば、「派遣された者は半分が現職の小・中・高校の教員、半分が一般人で、日本語教育のプロはもともと存在しなかったので」(81頁)あり、「養成期間は短くて2週間、長くて6週間で、日本語教授経験のない者が教育技術を身につけるのに十分な期間とは言え」(81頁)ず、その上「講師陣の中に日本語教授法に精通している者が少なく、養成講習の内容自体も実践的な言語教育技術を教授する目的で組まれていない」(81頁)ばかりか「『大東亜文化建設』『大東亜文教政策』といった講義題目に象徴されるように思想統制に傾いているきらいが」(81頁)あり、「『指導者』としての『大和民族』が他民族に『率先

垂範』の姿勢をもって『指導』することを求めていた」(85頁)のが実態だったからである。「役人、理論家、実際家の日本語教師論からうかがえる日本語教師「錬成」の目的は、日本文化の「体得」、「醇成な日本語」の習得、実際的な教授知識・技術の習得というように、それぞれ異なるものであった」(89頁)が、いずれも「日本の政治目的に合致する思想的共鳴者を養成するということであった」(91頁)ことには変わりがなく、言語教育の専門家を送り出すという理念とは懸け離れていたのである。

「第5章 「南方」占領地における日本語教師」(93頁～117頁)では、「マラヤがマレー系・中華系・インド系の3民族を中心とする多民族で構成されていた点、及び学習者の年齢層の拡大に伴い学習者・学習目的が多様化した点」(93頁)を考慮し、「『南方』占領地域の「多様化」の実例として、マラヤの日本語教師」(93頁)が考察される。「軍政監部の日本語教師」(94頁～101頁)、「各州市の日本語教師」(102頁～106頁)、「現地の日本語教師」(106頁～114頁)についてそれぞれ概観してみると、「いたずらに『大東亜共栄圏建設』の理想を盲信し、ほとんど『強制』の自覚を持たずに日本語教育に奔走した者もあった」(114頁)が、必ずしもそのような姿勢に該当しない教師もあった(114頁)事実にも言及が及んでいる。

日本人教師に共通して言えることは、「日本語教育要員の約半数が都道府県推薦の現職教員であったことに象徴されるように、日本語教育教員として派遣された者は大学や師範学校卒業者で、いわゆる当時の高等教育を受けた者である」(115頁)り、「教養的な素養の高さという点では選ばれた人達であることは間違いない」(115頁)ということ、「教育に臨む姿勢として文化相対主義の姿勢で臨んでいた」(115頁)こと、更には「広い意味での人間教育を行おうという意識を持って」(116頁)「イメージジョン・プログラム」(116頁)を実践していたことが生徒に「我慢、頑張り、犠牲という精神、規律・勤労の尊さ、身分のいかに関わらず努力次第で国(公共)の発展のために寄与できるという自信を生涯にわたり、植え付けることになった」(116頁)こと、これらの事実が著者による現地での日本語教育体験者を対象とした聞き取り調査で明らかにされている。一方、「日本から派遣された日本語教師、その教員から教育を受けて実際に日本語教育にあたった現地の元日本語教師について個別に調査した結果」(116頁)浮かび上がってきた事実として、著者は「第一に、日本語教育専門家不在の中で展開されていた言語教育実践における異文化理解とコミュニケーション重視の姿勢の先駆性、言語の運用面に力点を置いた方法論における先見性」(116頁)、「ビジネス日本語教育の実施や、目的別

○○○ 比文叢書の反響

教科書の編纂」(116頁)、「第二に、現地の元日本語教師の回想から伝わってくる当時の教育から受けた波及効果の大きさ」(116頁)、「中でも特に日本人教師の人間教育への意識は、現地の日本語教員に生きる指針とも言うべき影響を与えた面もあったという意味で、非常に重要な側面を持っていたと言える」(116頁～117頁)との評価に至るのである。

「第6章 日本軍政下のサラワクにおける日本語教育施策」(118頁～136頁)では、「日本軍政下の「北ボルネオ」サラワク(現在のマレーシア・サラワク州及びブルネイ王国)における日本語教育の多様化の実態について解明」(118頁)が試みられるが、文献資料の不足は関係者に対する聞き取り調査という手法で補うとしている(118頁)。「北ボルネオ」軍政と教育方針」(118頁～119頁)では「日本軍政に協力する現地住民を「錬成」することが急務であった」(119頁)中、「初等教育レベルでの教育と軍政協力者を養成することに教育の主眼が置かれ」(119頁)たとしている。「教育の方法論」(120頁～123頁)では、「教科書・教材の使用による読み書き教育は初歩程度以上には進展しなかった」(123頁)点と「文字に頼らない教育が進められた」(123頁)、つまり、「身体的・身体儀礼的な訓練や歌による日本語の普及、実務に即した会話教育が推進された」(123頁)点を特徴として挙げている。「クチン州における教育施策」(124頁～128頁)は「強制的な奴隷化教育であった」(124頁)一方、「ミリ州・シブ州における教育施策」(128頁～132頁)では、ミリにおける教育として「ボルネオ燃料工産石油工業学校」の例が取り上げられ(129頁～130頁)、「生徒にはマレー半島、ジャワ、スマトラ出身の者もあり、イバン族などはいないが、中国系、マレー系、インド系がいた」(129頁)中で、「まさに団体生活の中での多文化接触の機会を経験したわけであり、それは生徒たちにとって今までにない新鮮な経験であったに違いない」(129頁)としている。また、ブルネイでは「土地の人々を日本の文化、言語、イデオロギーに適應させるよう最大限の努力をはらった」(130頁)のであり、シブでは「学校の呼称として「公民学校」が使用されている点、日本軍政への協力者育成のために日本語教育のみならず、メディアや行事などあらゆる宣伝活動が総動員されている点」(132頁)など「マラヤと同様の施策がなされている」(132頁)としている。また、「日本語教育の記憶——記録とのはざままで」(132頁～135頁)では聞き取り調査の結果として「人の記憶のひだを大きく左右するものはいったい何であろうか。それは、その人自身の存在価値が認められ発揮されたかどうかと、人と人との関係性という要因に大きく左右されるのではないか」(135頁)との洞察に至っている。

「第7章 「北ボルネオ」における日本語教育の波及効果」

(137頁～159頁)では「日本軍政下の「北ボルネオ」(現在のマレーシア・サバ州、サラワク州とブルネイ王国)における日本語教育が現地の人々に対する間接的波及効果として、民族意識の覚醒と連帯をもたらした一面もあったのではないか」(137頁)という仮説について検証されるが、マラヤにおいては、著者が「直接聞き取りを行った中にも日本の教育を受けたことにより日本占領期のみならず、その後の人生においても生きる指針を与えられたといった類の証言が複数」(143頁)あり、「学歴・民族のいかんを問わず日本人から直接教育を受け、活躍の場を与えられた若い人々にその傾向が強い」(143頁)と言えるのに対して、北ボルネオではそれほどでもなく、研究自体も進んではいないという見方が定説となっている(144頁)。しかしながら、「北ボルネオ」における各エスニック集団に対する日本軍政の波及効果があまり大きくないということは必ずしも波及効果がなかったということの意味するのではなく、半島に比してという相対的比較に他ならない(144頁)こと、記録の少なさは「日本占領下の体験が忘れ去ってしまいたいほどの悲惨な記憶だ」という言説が繰り返されていくことで人々の間にその言説が刷り込まれ、語ることを忌避する感情が増幅されていったのではないかと(145頁)指摘されている。なお、悲惨な記憶については、「マラヤとサラワク、ブルネイには以下のように著しく異なる要因もあった」(145頁)として、「反日・抗日の動きはあったとしてもマラヤ・シンガポールほどには顕著には表れなかったこと」(145頁)、「マラヤと比較して学校教育は極めて低調で、社会人を対象とする一般教育も軍政協力要員を養成する程度で広範な普及には至らなかったこと」(145頁～146頁)、「マラヤでは言語政策が極めて曖昧で、特定の言語が公用語に指定されることはなかった」(146頁)が「北ボルネオ」では日本語の普及と併せてマレー語だけが公用語とされたこと」(146頁)の3点に言及が及んでいる。

次に、「ブルネイの歴史教科書から日本軍政の波及効果を拾っていく」(146頁)と、「第一に、日本軍政は日本への心服を得る点では失敗したが、そこで実施された組織作り、文化活動は「結果的に」ブルネイの人々の政治意識、愛国意識を喚起する機能を果たした。第二に、日本による「日本化」政策、つまり日本語教育を含めた様々なレベルでの訓練・機会が若い人々に刺激を与え、意識の変革を促した」(148頁)事実が浮かび上がってくるとしている。

また、日本語教育施策の特徴は「教育設備、教育体系、教育内容のいずれをとっても戦前の程度を超えるものとは言えずマラヤと比較してみても教育施策に見るべきものがなかった。」(150頁)、「全体的には1943年12月には学校の

再開率が6割にまで回復したと総括されているが、ミリ州のように児童の復学率が入学適齢児童の13分の1にすぎないという州もある。全般的に見て教育の普及範囲が小学校や日本語講習所、日本語学校という狭い範囲に限られていた。(150頁)、「中国大陸や「南方」など他の占領地同様、学習者は児童だけでなく成人にまで広がり、学習者・学習目的の多様化が見られる。その一方、教科書・教材類が現地で編纂された形跡は確認できず、教科書・教材の多様化が見られるほどには日本語普及は進展しなかった」(150頁)という3項目にまとめられ、「北ボルネオ」では初等教育を中心とする普通教育は極めて低調に終わった」(150頁)との評価が下されている。

教育施策の特徴としては、「現地住民の政治参与の特権、地位の向上をはかる際のひとつの条件として日本語の習熟、日本への忠誠心、勤労精神といったものが重視されている」(151頁)点と「日本語教育が児童だけでなく成人をも対象としたという点で学習者に多様化現象が見られたという点」(151頁)が指摘される一方、「先住民族固有の文化を尊重し、それぞれの特性を伸ばすような指導を目指そうとしていた」(152頁)事実も明らかにされている。

「北ボルネオ」は戦前「イギリスの勢力化にあった」(153頁)が、そのような社会に暮らしていた人々にとって「日本化」の施策」(156頁)はどのように映ったか。この点について、著者は「英語教育を受け欧米的価値観を崇拝していた者にとっては、英語から日本語への転換を受け入れるかを含め、戦前の価値観を大きく揺るがされる体験をしたであろうということ」(156頁)、「サラワクで中国語教育を受けていた者にとっては、日本軍政下の「日本化」の施策及び反日行動への弾圧に対し、更なる反日の感情が加速されたのではないかということ」(156頁)、「日本軍政に協力の態度を示した者にとっては、マレー語が公用語とされたこと、及び成人が同じ教室で日本語を学び、さらに日本人とともに働く職場で日本語を使うという言語の共有化を体験する場が提供されたことで、各民族間の言語的隔たりが緩和される方向性ができたのではないかという点」(157頁)の3点を指摘するのである。

こうして、「日本軍政下の「北ボルネオ」における日本語教育が現地の人々に対して間接的ながら、民族意識(土地への帰属意識を含む文化的帰属意識)を喚起する契機をもたらした一面」(157頁)がある一方、「日本語学習を含めた日本軍政期における直接体験は、それに関する歴史認識を共有することで、それぞれの土地への帰属意識を醸成する装置として、さらに逆利用されていると捉えることもできる」(157頁)との解釈が施されることになる。

「終章」(160頁～167頁)では、それまで論述されてきた各章の概略が要約された後、「日本軍政期の歴史は、マレーシアの人々にとって忘れ去りたい負の記憶として残る一方で、こと教育に関しては今なお高い評価をしている人々もたしかに存在する」(166頁)中で、「個々人の認識の落差をどのように解釈し、今後の日本語教育に生かしていったらよいのか」(166頁)という研究動機が再確認される。その上で、「時流に流されない教育を行うには教育者自身が教育に対する理念や信念を絶えず問い続けていくことが必要とされるということではないだろうか」(167頁)との見解が「日本語教育の構造自体がいとたやすく政治的圧力に屈してしまう脆弱さを内包している」(167頁)状況や「戦前、国力とともに対外進出していった日本語教育の歴史そのもの」(167頁)を見つめながら語られているのである。

2. 考察

本書は、第二次世界大戦下における日本の東南アジア進出に伴う日本語教育の状況を日本人日本語教員の養成と彼らが現地で及ぼした波及効果について論証しようとした渾身作である。「参考文献」(169頁～185頁)、「資料編」(187頁～200頁)に掲げられている通り、貴重な文献を発掘し、それらを読み込む中から当時の教員養成に「錬成」というキーワードを発見しようとしている姿勢もさることながら、数次にわたってフィールドワークを実施し、インタビューに応じた当時の日本語教育経験者に現地調査協力者の数を併せると優に50を上回っている(個人+団体)ことも特筆せねばなるまい。まさに、著者が一步一步大地を踏みしめるかのようにして得た記録が生き生きと再現され、論証に説得力を持たせる効果を生じさせていることも、本書の魅力に彩りを添えるものであると言えよう。生き証人の言葉を粘り強く記録し、意味付ける中で、本書は総力戦下南方日本語教育に関する史的研究となり得た。

著者は、当時の日本語教員養成が「錬成」という立場で貫かれていたと述べる。日本の戦局が悪化の一途を辿った当時、「錬成」という概念は外地に派遣される日本語教師のみならず、内地における教員養成にあっても支配的な雰囲気であった。本書で得られた考察に、戦時下の師範学校教育の状況や、国民学校、中学校、女学校で実際に行われていた修身教育、さらには教練の様子を重ね併せていけば、国家の模範たれというスローガンが教育界を覆い、教師、児童・生徒共々その理想へ向かって突き進んだ状況が、南方占領地でも実践されようとしていた様子に思いを深くさせられるのである。著者は、当時の日本語教員養成によって生まれた教師や、その日本人教師の影響下にあった現地教

○○○ 比文叢書の反響

師、児童・生徒の、その後の人生に「錬成」教育が大きな思想的影響を及ぼしたのではないかという仮説を立てている(38頁、60頁)。多感な10代に受けた教育が人間にとってその後の人生を決定する程までに極めて重要である事実は今更論じるまでもない。本書で考察対象となった時代と地域は戦局下という人間の生死がかかった日々におけるものであるだけに、そこで得た教えは戦争を知らない世代には想像もできない程の切迫感を持って当事者における心の拠り所となった可能性があるものであり、その事実は重く見なければなるまい。

著者が注目した「錬成」という概念を中心に時局に思いを馳せれば、当事者すべてがその価値を信じ、そこによりずがなければならない教育が成立しないような状況にあったと想定できるのではないだろうか。日本語教師は「錬成」されることによって、戦地へ赴く自己を正当化できたのであるし、現地にあっても指導的立場を担う者として節度をわきまえた振る舞いを取り得た。よって、徳目の押し付けに走った教員もありはしたであろうが、多くの異なる文化的背景を持ち、多様化した学習者との間に人間関係を構築し、その集団内部で指導者としての尊敬を受けるためには、柔軟な態度で学習者に接することが必要であることに現場で気づいた教師も少なくなかったはずである。著者のインタビューに対して当時の日本人教師を肯定的に評価する声が現地人の中にあつたというが、この現象はまさに指導者に対する敬愛の念を抱いてのことであり、「錬成」で得た知識や思想が柔軟に現地で実践された場合に生じるケースである。翻って、授業が日本語の押し付けに終始した場合、その教室活動は現地人にとって忌み嫌う過去になり果てたはずである。

日本語という異文化を受け入れる立場にあつた現地人にとっても、「錬成」という概念は日々生き延びていくために必要不可欠な概念であつたと考えられる。現地の日本語教師にとっては、本場の日本から派遣されてやってきた日本人教師が模範なのであつた。日本語の書籍や教材も限られていた当時、現地の教師は日本人教師との交流を通して、日本語・日本文化というものを体験的に摂取する以外に自らの専門的力量を高める方法はなかつたに違いないのである。だとすれば、模範の日本人日本語教師のようになりたいと願いながら、心理的に日本人教師と一体化しつつ努力を継続していくことで、現地教師が成長していった可能性は確かにある。さらに、学習者にとって、教師が模範たるべき存在であることが幸福な師弟関係を築き上げ、学習者の能力を伸ばす結果につながるの疑うまでもない。学業修了をもって教師との間の公的関係が終わりを告げても、なおその後、長期にわたって私的な人間関係が継続するな

らば、元・学習者は教師の専門知識に加えて、人格面で敬う姿勢を持っている場合が極めて多いのは今更言うまでもない。「総力戦」下にあつては、日本語の強要という否定的側面が強調されるきらいがあるが、著者がインタビューで発見しているのは、当時の日本人教師を人間的に認め、懐かしんでいる元・学習者があるという事実である。「錬成」された日本人教師のような存在になりたいという気持ちを学習者に持たせ得た場合、日本という存在は学習者の中で憧れの対象となるのであり、そこにピグマリオン効果も発生して、日本語の上達、ひいては、日本人との和合を希求する精神が涵養されるのである。

「錬成」され、南方に送られた日本人教師は、約半数が都道府県推薦の現職教員であつたし、残りの半数も、高等教育を受けた者で占められていたと言う。彼らは戦後、日本の教育界に復帰し、また、実社会にも出て行ったであろう。このグループは終戦を境に「錬成」によって作り上げた自己を捨てることができたか。ここからは著者に代わって評者が仮説を展開してみることとするが、自らの血となり、肉となった「錬成」を信じることで国家・社会に奉仕したいという祈りに支えられたが故に南方まで出向く決心を成し得た日本語教師達が戦後、簡単にその思想・信条を改めたとは考えにくい。戦時体験が帰国した元・日本人教師に如何なる形で影響を及ぼしていったかという点に思いを馳せる時、「錬成」教育を受け、その成果を南方占領地で実践した体験は過去の出来事として整理しつつ、日本の戦後社会を牽引する存在として活躍することが海外体験をし、グローバルな視野を持った彼らには期待されたと考えられる。教育現場に復帰した教師であれば、戦局下とは違ったスタイルで戦後新教育の中に「錬成」で得た自らの生き方・在り方を応用させ、昇華させながら活かしたと思われる。実社会に出た元・教師もそれぞれの業界で、人材育成の際に「錬成」教育を応用したのではないか。教師に忠実であれ、学校に従え、社会の模範たるべき人間になれ、自己犠牲的精神で社会に尽くせ……、真面目、努力、勤勉、滅私奉公など、私たちは、「錬成」教育の一端を戦後の高度経済成長を支えた価値観の中に、さらには現在も学校現場の校訓や社会が理想とする人間像の中に垣間見ることができるとのである。その時、著者が着目する「錬成」教育が再生産され、今なお生き続けている事実に気づかされるのである。

著者は、本書に加え、参考文献として下記に掲げた文献も併せ、戦時下におけるマラヤ日本語教育の史的研究では前人未踏の研究成果を挙げている。本書が日本語教育従事者はもとより、教育関係者、歴史学者の間でも広く読まれ、一人でも多くの読者にとって人間形成の在り方を考える契

機となることを念願してやまない。

参考文献

松永典子『日本軍政下のマラヤにおける日本語教育』（風間書房 2002年2月）

松永典子編（研究代表者）『平成18年度～20年度 科学研究費補助金基盤研究（C）報告書 課題番号18520410 多文化・多様化状況に即した日本語教育方法論の探求——戦時下の

日本語教師養成を手掛りに——』（2008年2月）

[Book Review: The Talented Person Training and Teaching Japanese to Speakers of Other Languages under “The All-Out War” Written by MATSUNAGA Noriko]

[TOKUNAGA Mitsuhiro・福岡工業大学社会環境学部准教授・日本語・日本文学]

【新刊紹介】

黄 英著 『宮沢賢治のユートピア志向
—その生成、崩壊と再構築—』

『国文学 解釈と鑑賞』 平成21年12月号より転載

松 本 鶴 雄

(日本大学・大学院客員教授)

著者・黄英さんは中国人、現在は青島の海洋大学の日本語、日本文学助教授。かつて北京日本学術研究センター（修士課程）を出て九州大学で博士課程を修了した女性。それらの期間も宮沢賢治研究に熱中していた。その結果の本書である。副題の「その生成、崩壊と再構築」は本書のテーマ。賢治作品を中心として、賢治のユートピアを綿密な分析と構想とで追求している。たしかに宮沢賢治の文学は独特のユートピアに溢れている。しかし、それを直接に論じた評論や研究書は意外に少ない。吉本隆明「賢治文学におけるユートピア」や小野隆祥『宮沢賢治の思索と信仰』くらいである。

それらは黄英が本書でふれているように、作品分析を通したものではない。賢治の仏教観や「農民芸術概論綱要」などの思想等に重点をおいている。それゆえに作品を通してのユートピア論は本書が最初であろう。宮沢賢治の童話集『注文の多い料理店』は「イーハートブ童話」と名付けられる。新刊案内を作者自ら書いている。作者の心象中のイメージ「日本岩手県」であると断っている。それについて本書の「はじめに」で論者・黄英は次のように述べる。「ここには、賢治の故郷岩手県をドリームランドの原点として、イーハートブの夢が語られている。現実の岩手県はドリームランドとは反対に、悲惨な農村の風景が広がっていた。にもかかわらず、賢治は心の中で、それをひとつのドリームランドとして展開する、(略…) このイーハートブへの夢は賢治の

ユートピア志向の現れとも言えよう」と。

しかし、現実には賢治のユートピアは単純に、短期間に達成さるべくもない。何度かの中絶や脱線や幻滅が起こる。それを全て賢治作品を通し本書では追究する。しかも賢治は再度にわたり以前よりも的確なユートピア思想を作品化していく。それを説明するのは各章題の引用がわかりやすい。第一章「ユートピアの生成——彼方への視線」は『「旅人の話」から』や『双子の星』を中心の論考。その断絶を迎えるのが第二章「デストピアの様相——『蜘蛛となめくじと狸』」である。そして、『とつこべとら子』、『雪渡り』、『カイロ団長』などを原点としたのが第三章「現実批判の様相——大正13年までを中心に」である。その後には第四章「楽園の崩壊——『黄いろのトマト』」がくる。そして再び賢治の再起が始まるのが、『ひかりの素足』などに現れた「ユートピア再構築への出発」の第五章だ。そして、最終の第六章「現実生活におけるユートピアの再構築——『ポラーノの広場』」である。ここでの悪役の山猫博士の分析が特に印象的である。さらに特徴的なのは、この「六章」の終末での宮沢賢治と同時代の武者小路実篤の「新しき村」との比較研究であろう。本書ではそれを「実働」や「個と全」などで比較する。全体に賢治のユートピア思想がよく描かれている。

(2009年2月20日 A5判210頁
定価2,500円 花書院)

赤いスカーフを捨て、夢を追いかけて

魏 景玉

(日本社会文化専攻)

今年度、修士課程に入学した魏景玉と申します。大学を卒業してから航空会社でフライトアテンダントとして三年間勤務した後、退職して日本に来ました。友人からは「馬鹿だ」と何度も言われましたが、後悔したことはありません。今でも、仕事を辞めて得たものは失ったものよりずっと多いと思っています。

私は自分のことをラッキーな人だと思っています。なぜなら、あまり美人ではないのに、女性が憧れる仕事に就くことができたからです。自分でも想像すらできないことでした。就職して最初の一年間は、夢のような日々が続きました。お化粧、制服、一週間の出張、朝5時までの夜勤…。苦しいことでも、私にとっては新鮮で楽しい体験になりました。お客様とのコミュニケーションや接客マナー等、いろんなことを学んで、他人への面倒見もよくなりました。緊急着陸トレーニングのために水泳も習いました。「年を取ったとき、孫に昔話として話せるわ…」と思えるくらいの体験でした。

ところが二年目に入ると、このまま、この仕事を続けていいのだろうか、本当にこの仕事が好きなのだろうか等の疑問が頭に浮かぶようになりました。仕事の雰囲気になじめなかったこと、仕事以外にやりたいことがあっても時間がないこと、激務による疲労の蓄積、等の問題もありました。その頃、パソコンが得意なことを上司に見込まれ「オフィスでの勤務をやってもらえないか」と依頼を受け、それを兼職することになりました。書類の作成から始まり、全従業員への定期トレーニングのアレンジメントや、他社からの出向者に対する応対も任されました。「総合職の人みたいだ」と褒められたこともありました。これらの仕事を通して、自分がやりたいことは何なのか、やっと分かりました。お洒落な制服や華やかな生活ではないです。自分の価値や実力が発揮できる場所こそ私の人生舞台になるのだと思いました。その後、私はためらいなく、会社を辞めました。

私は日本語学科出身だったので、日本に留学しようと決めました。福岡には在職中に何度も来たことがあり、この中国人が多い都市にはきっと魅力があるというイメージを持っていました。福岡の大学の中でも、九州大学は自分の夢をかなえられる場所だと思いました。日本語学校で一年

間基礎的な勉強をした後、入試を受けました。やはり私はラッキーな人で、合格することができました。

伊都キャンパスでの入学式に参加したときには、研究施設も新入生も新しく新鮮なものばかりで意欲が湧いてきました。しかし、進学してからは、優秀な先輩方と一緒に授業を受け、修士論文の構想を検討する中で、日本語能力だけでなく、専門知識の不足を痛感しました。先輩方のような素晴らしい論文が書けるかなと心配になることも時々ありました。

それ以外にも、色々な壁にぶつかることもあります。留学するということは外国語を習得するだけでなく、多くの貴重な経験から「生きる力」を身につけられるという意義があると思います。また、先生や先輩が親切でいつも応援して下さいるので、私も困難に立ち向かい、頑張っていくことができます。

仕事の経験も留学経験も、全て自分自身の成長につながると信じています。これからも、夢を叶えるために、新しい自分を見つけに行くために、少しずつでも前に進んでいきたいと思っています。



2007年秋 広州白雲空港ターミナルにて

グラミン銀行総裁ムハマド・ユヌス氏による学生トークセッションの開催と書籍『BOPを変革する情報通信技術—バングラデシュの挑戦』の出版

大杉 卓三

(社会情報部門・社会変動講座)

2009年9月27日、九州大学伊都キャンパスの嚶鳴天空広場(Q-Commons)において、バングラデシュのグラミン銀行総裁ムハマド・ユヌス氏を招き学生とのトークセッションが開催された。嚶鳴天空広場は伊都キャンパスのセンター2号館4階にあり、比較社会文化学府の比文言文教育棟からは目の前に位置する。ムハマド・ユヌス氏は、同氏が設立したグラミン銀行と共に2006年にノーベル平和賞を受賞している。ノーベル平和賞以前には1984年に「アジアのノーベル平和賞」といわれるマグサイサイ賞、2001年には第12回福岡アジア文化賞大賞を受賞するなど、ムハマド・ユヌス氏の取り組みは世界的に高い評価を受けている。

ムハマド・ユヌス氏の創設したグラミン銀行は、これまで銀行から融資を受けることができなかった貧困層の人々を対象に、無担保で少額の資金を融資する「マイクロ・クレジット」を実施しており、貧しい人のための銀行として知られる。現在のグラミン・グループは医療、教育、エネルギー、情報通信など様々なサービスを提供している。現在、ムハマド・ユヌス氏が説く「ソーシャル・ビジネス」の概念は世界中で大きな注目を集めている。ムハマド・ユヌス氏はこの概念において資本主義の欠陥を補完するため、これまでの利益追求のみを優先するビジネスだけではなく、貧困撲滅など社会問題の解決を掲げた新たな社会経済モデルの構築を目指している。これまでバングラデシュなどの開発途上国の貧困層に向けたサービスとして実施されてきたマイクロ・クレジットなどの取り組みは、リーマンショック以降の世界経済の停滞により日本や欧米など先進国にも導入されようとしている。

トークセッションは、大学生との直接対話の機会を持つことを希望したムハマド・ユヌス氏の要望もあり実現した企画である。トークセッションの企画と当日の運営は、学生グループ「QITY」がおこなった。QITYの企画準備と当日において、九州大学大学院 システム情報科学研究所(九州大学 次世代研究スーパースター養成プログラム・SSP研究員)のアシル・アハメド特任准教授と私とで手助けをおこなった。開会にあたり有川節夫総長からの挨拶がおこなわれたあと、第1部のパネルディスカッションでは6名の学

生パネラーが「グラミン銀行の取り組み。ソーシャル・ビジネス、世界経済」「ユヌス先生の哲学、価値観、人生観」をテーマとして設定しディスカッションをおこなった。第2部は会場全体の参加者を対象に質疑応答がおこなわれ、会場から次々と質問が投げかけられた。ムハマド・ユヌス氏からは、「貧困は人間が生み出した問題であり、人間が社会経済のシステムを改善すれば貧困は必ず撲滅することができる。将来、貧困は博物館の展示物になる。」と説き、「次世代を担う学生は、可能性を信じて世界の中での自分の役割を考えて活動して欲しい。」と語った。



伊都キャンパスで開催されたユヌス氏と学生とのトークセッション。

トークセッション前日の27日(日)、福岡市の都久志会館において、福岡アジア文化賞委員会と九州大学の主催による「福岡アジア文化賞20周年記念 ムハマド・ユヌス氏講演会」が開催された。講演の事前の申し込みは早々に定員に達してしまい、関心の高さがうかがえた。ムハマド・ユヌス氏の講演に先立ち、アシル・アハメド特任准教授と私とで、グラミン銀行とムハマド・ユヌス氏のこれまでの取り組みについての報告をおこなった。

講演に続き、ムハマド・ユヌス氏、九州大学の安浦寛人



福岡アジア文化賞20周年記念のムハマド・ユヌス氏の講演。

副学長、そしてNTTの篠原弘道取締役による、ソーシャル・ビジネスに関する教育・研究・啓発・インキュベーションに取り組む研究機関を設立のための覚書締結がおこなわれた。この研究機関はフランクフルトに本社をもつグラミン・クリエイティブ・ラボ (GCL) による「グラミン・クリエイティブ・ラボ@ユニバーシティ」の一つとして設立される。すでに、グラスゴー大学 (イギリス)、ミュンヘン大学 (ドイツ)、ミラノ大学 (イタリア) など数カ国にGCL@ユニバーシティが設置されている。日本国内では九州大学が2カ所目となるが、「GCL@九州大学」が設立されれば、実質的には九州大学がソーシャル・ビジネス研究・教育をおこなう拠点になることが期待される。九州大学ではGCL@九州大学に加えて、グラミン・テクノロジー・ラボ (GTL) の設立を予定している。GTLはグラミン、九州大学に加えて企業が連携する組織であり、世界でも最初の取り組みとなる。

この覚書締結より以前に、九州大学は2007年7月にグラミン・コミュニケーションズと学術交流協定を締結している。グラミン・コミュニケーションズはグラミン・グループの組織である。すでに九州大学では学術交流協定により様々な研究教育プロジェクトを実施している。また平成22年度からはJICA (国際協力機構) 草の根技術協力事業の「ICTを活用したBOP層農民所得向上プロジェクト」がバングラデシュにおいて開始される。これは九州大学熱帯農学研究センターの緒方一夫教授を代表とし、アシル・アハメド特任准教授の研究プロジェクトをベースに、私や九州大学の他部局も参画するプロジェクトとなる。

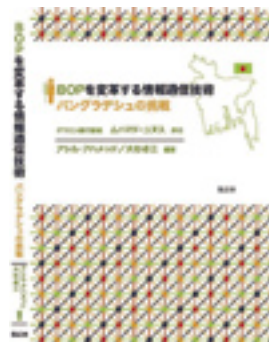
「福岡アジア文化賞20周年記念 ムハマド・ユヌス氏講演会」の会場において、アシル・アハメド/大杉卓三 編著の書籍『BOPを変革する情報通信技術—バングラデシュの挑戦』刊行についてプレスリリースがおこなわれた。ムハマド・ユヌス氏が本書の序文を執筆している。編著者以外には、九州大学理事・副学長の安浦寛人教授、国際交流推進室の飯島聡特任教授、大阪大学大学院人間科学研究科の



九州大学におけるグラミン・プロジェクトの主なメンバー。

大谷順子准教授、そしてバングラデシュのカシフィア・アハメド氏が各章を担当している。

本書は九州大学とグラミン・コミュニケーションズの共同研究の成果に基づき、バングラデシュにおいてICT (情報通信技術) が導く社会経済の変革について具体的事例を綴ることで、そこに暮らすBOP (Base of the Pyramid: 所得ピラミッドの底辺層) の人々の姿を明らかにしている。本書の舞台であるバングラデシュをはじめとする開発途上国ではBOPと呼ばれる貧困層が人口の多くの割合を占める。世界で40億人以上といわれるBOPを巨大なマーケットとして再定義し、持続的なビジネスを通して貧困削減に取り組む戦略が注目を集めている。BOPマーケットでは、社会的利益を最優先させ、BOPの人々が自ら取り組む「ソーシャル・ビジネス」が重要であり、そこにICTは不可欠なツールとなっている。ICTを活用することで人々は適切な情報を入手し、またコミュニケーションは人々の連帯を実現する。その結果、BOPの人々は自らの能力に自信を持ち、単なる消費者ではなく新たな富を創造する生産者となりうる、と本書では述べている。すでに開発途上国において、ICTが農村部でも人々の身近に存在する風景は、ありふれたものになろうとしている。グラミン・グループやGCL@九州大学、GTLの活動に興味をもった学生は、ぜひ本書を手にとって欲しい。



書籍『BOPを変革する情報通信技術—バングラデシュの挑戦』アシル・アハメド/大杉卓三 編著 (集広舎、2009年9月)。ムハマド・ユヌス氏が序文を執筆している。

ソウル大学への交換留学を振り返って(2008.9-2009.7)

金 泰 植

(日本社会文化専攻)

留学手続きは、トラブルと共に始まった。大学院係に提出した交換留学に必要な書類が、国際交流部から返送されて来たとの連絡を受けた。何でもソウル大学校から、「朝鮮」籍の学生は政治的理由により受け入れられないとの返事があったとの事だった（「朝鮮」籍について詳しい説明は避けるが、在日朝鮮人のうち韓国籍に変更または帰化しなかった者が「朝鮮」籍であり、よく考えられているような朝鮮民主主義人民共和国国籍では無い）。頭が真っ白になった。けれども同じ「朝鮮」籍の学生で、韓国に留学したと言う事例を聞いた事があったので、すぐに調べ、複数の事例を挙げながら何故駄目なのかを問い合わせしてみた。すると今度は九州大学側の手続き上のミスで、ソウル大は拒否をしていないとの回答を貰い、急遽学内面接を受け、結果的に留学許可が下りるようになった。「朝鮮」籍であると言うのはなかなかややこしく、その後韓国領事館で「面接」を経て、やっと交換留学に向かう事が出来た。在日朝鮮人三世である自分にとって韓国は、ハラボジ、ハルモニが暮らしていた土地であり、分断された祖国の半分である。そしてこの分断体制が故に「朝鮮」籍が政治的になる。韓国には旅行や学会発表などで訪れた事があり、今回は5回目の滞在になったが、実際に生活をする事で、旅行や日本における韓流イメージからは見えて来ない側面を見る事が出来た。

ソウルはまず食べ物が安く、量が多くて美味しい。地下鉄やバス、タクシーも安く、特にT-moneyと言う電子マネーを利用すると、地下鉄とバスの料金が割引になり、乗り換えも無料になるなどとても画期的だった。ただし冬はマイナス10度を越え、外に出ると寒いのを乗り越えて痛かった。留学先のソウル大学校は、九大伊都キャンパスほどではないが少し不便な所にあり、敷地は広大で学内に食堂が15箇所以上あり、また山の中にある為に坂道が多い。学内にバスやタクシーがたくさん走り、隣にある冠岳山に登りにきた登山客も多く、とても賑やかな大学だ。学内で毎日何かしらのシンポジウムが催されていて、韓国の色々な知が集まって来る、とても良い環境だった。留学の前半は寮で生活をしたが、ソウル大学生は一日中勉強をしているので驚いた。24時間利用可能な中央図書館や、寮の食堂などで、多くの学生たちが一生懸命勉強をしている。しかしその一

方で、勉強内容は授業で良い成績を取るため、または資格の勉強に偏りがちで、厳しい就職状況のためとは言えとてももったいない気がした。また南北関係の授業に出て驚いたのは、先生は北の文献を直接生徒たちに配る事は出来ず、発言一つ一つも遠回しにしなければならない事だった。これは国家保安法との関係だが、まだまだ韓国では自由な言論、教育も難しいのだなと思った。

さて肝心の研究生活だが、留学中はまず韓国映像資料院に通って調査を行った。韓国映像資料院には、韓国映画のフィルムや脚本、DVDやVOD、関連する論文や書籍の閲覧が可能で、そこに通いながら在日朝鮮人が登場する映画についての調査を行った。主に70年代の反共映画を中心に調査を行ったが、状態が悪いビデオテープや、主人公がしゃべる全羅道訛り、エロ映画も調査する自分への周りの視線と格闘しながら、有意義な調査を行う事が出来た。この調査の成果はInter-Asia Cultural Studiesなどのいくつかの学会や研究会で発表し、また京都大学のGCOEプログラムのワーキングペーパーや、立命館コリア研究センターの論文集に投稿する事ができた。また留学中には、九大のゼミとソウル大社会学科との共同研究会をソウルで開く事が出来、今年2月には九大にて2回目を行う運びとなった。韓神大学校や聖公会大学校でゲスト講義をする機会にも恵まれ、また韓国社会史学会定例研究会のコメンテーターや、在外



ワークショップ「東北アジアにおけるコリアン・ディアスポラの親密圏と公共圏」

同胞映画祭の定期上映会のゲストスピーカーを務めるなど幅広く活動し、貴重なコメントも頂きたくさんの事を学ぶ機会になった。

留学中は韓国の学生はもちろん、多くの留学生、また世界中から来たコリアンとも仲良くなった。アメリカ、中国はもちろん、カナダやドイツ、フランス、ウズベキスタン、ブラジルやアルゼンチンから来たコリアンとも友達になり、それぞれのおかれた境遇の違いと共通点は、自らを考える上でとても良い機会になった。同じ在外同胞でも、英語を出来るか出来ないか、経済水準が高い国かそうじゃないかによって韓国社会における対応が異なり、とても寂しい現実だと思う。また多くのコリアンが居住国の国籍を取得している反面、在日朝鮮人の中でも特に「朝鮮」籍在日朝鮮人は無国籍とも言える状態であるのはとても特殊な例だと再認識した。その為国民登録も外国人登録も出来ず、身分証明が出来ないので、携帯電話も契約出来ず、ネットで物を買う事も出来ずに非常にストレスが溜まったと言える。



留学仲間と「焼き貝」と焼酎で研究のストレスを発散

また留学中、韓国で様々な事が起きた。その中でも特に衝撃的だったのが、竜山で起きた撤去民に対する弾圧で市民と警官が犠牲になった事件であり、またノ・ムヒョン大統領の「自殺」であった。いずれも李明博政権の下で進められる再開発により、多くの撤去民が住居と仕事を追われて

いる。ニュースのみならず、実際に奇麗になっていく町並みと、同時に生活を追われた人たちのデモやピラなどを通して、リアルに変化を感じる事が出来た。そのような社会への不満が、ノ・ムヒョン大統領の国民葬を景気に爆発したように思える。封鎖を解かれたソウル広場に詰めかけた多くの群衆の中に自分もいたが、泣き崩れる多くの人たちが、ノ・ムヒョン大統領に見た希望について深く考えさせられた。韓国では現在、市民運動や言論に対しての統制が強まっている。それらに反対する「時局宣言」が、知識人や学校教員、また学生たちによって出されているが、賛同した教員に処分が科されるなど、民主化は後退しているとも言える。しかしいくらキャンドルデモが起きても、またノ・ムヒョン大統領の逝去により運動が盛り上がりつつも、政権は変わらない。何故なら、李明博大統領を支持する人も多いからである。

10ヶ月の留学生活は、あっという間に終わった。楽しかった思い出がたくさんあるが、同時にそうでない経験もあった。それらを通して韓国と言う国家について、日本について、そして自分自身についてまた一度考えるきっかけになった。この経験は、今後の研究生活に必ずプラスになると信じている。貴重な機会をくれた九州大学とソウル大学に感謝しながら、一日も早く博士論文を書けるように頑張ろうと思う。



研究の道は長く険しい……。

編集後記

比文創立と同時に教員(当時は教官)生活をスタートした私にとって、そのころからおられた先生方が比文を去っていかれるのは、とてもさびしい思いがします。「弱虫、がんばれ!」という神様のおぼしめしか、2月末から3月初めに、コーディネーターをつとめる『日欧先端科学セミナー』(日本学術振興会・ヨーロッパ科学財団)が開催され、さびしさをつかのま忘れて、目が回って倒れそうな忙しさを味わいました。その余波で、クロスオーバー本号の刊行がおくれ、執筆・お世話をいただいた先生方にご迷惑をおかけいたしました。この場をかりてお詫び申し上げます(溝口孝司)。



九州大学



伊都キャンパス
センターゾーンと
比文・言文研究教育棟

SCSのロゴの説明



SCS(エス・シー・エス)は、九州大学大学院比較社会文化学府の英文名称 Graduate School of Social and Cultural Studiesの略称です。ロゴはSCSを図案化したものです。考案者は「二羽の鴨に見える」と主張していますが、「一羽にしか見えない」と言う人もいます。しかし家鴨ではないという点では、私たちの意見は一致しています。裏庭の囲いのなかで餌をもらって外の世界を知らずにいる家鴨ではなく、越境する渡り鳥である鴨こそが、私たちのめざす新しい学府にふさわしいと考えているからです。



GRADUATE SCHOOL OF
SOCIAL AND CULTURAL STUDIES

発行者 九州大学大学院比較社会文化学府
発行年月 2010年 3月

〒819-0395 福岡市西区元岡744

TEL : 092(802)5786・5787

FAX : 092(802)5785

ホームページ : <http://scs.kyushu-u.ac.jp/index-j.html>